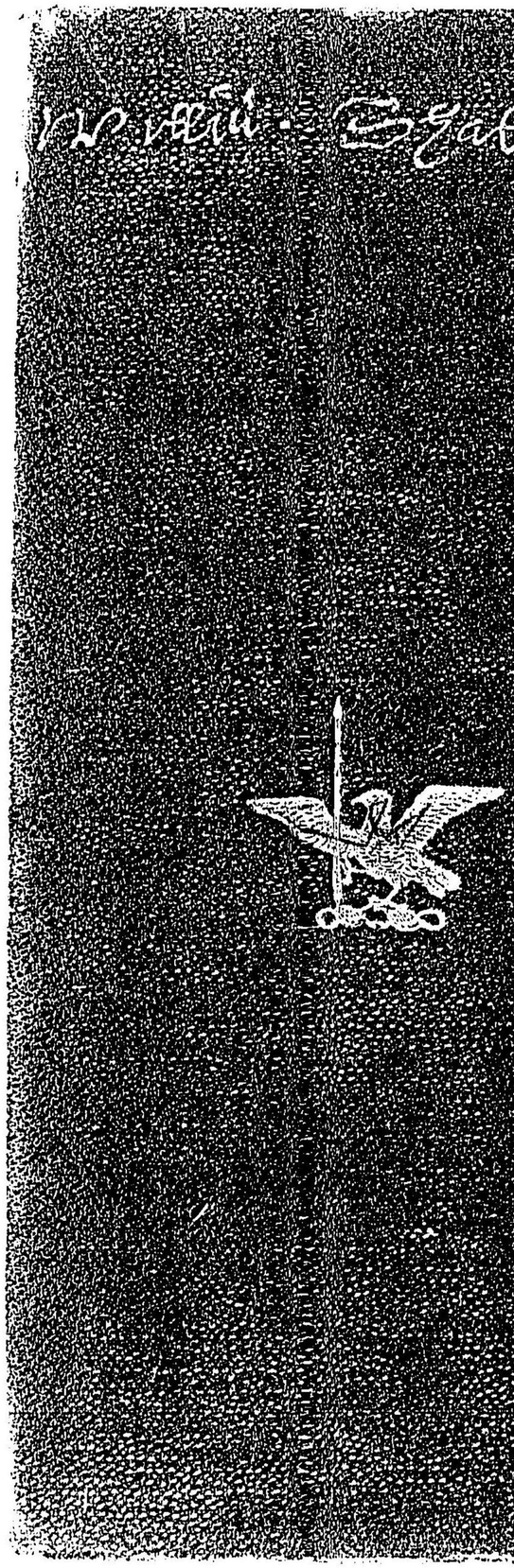
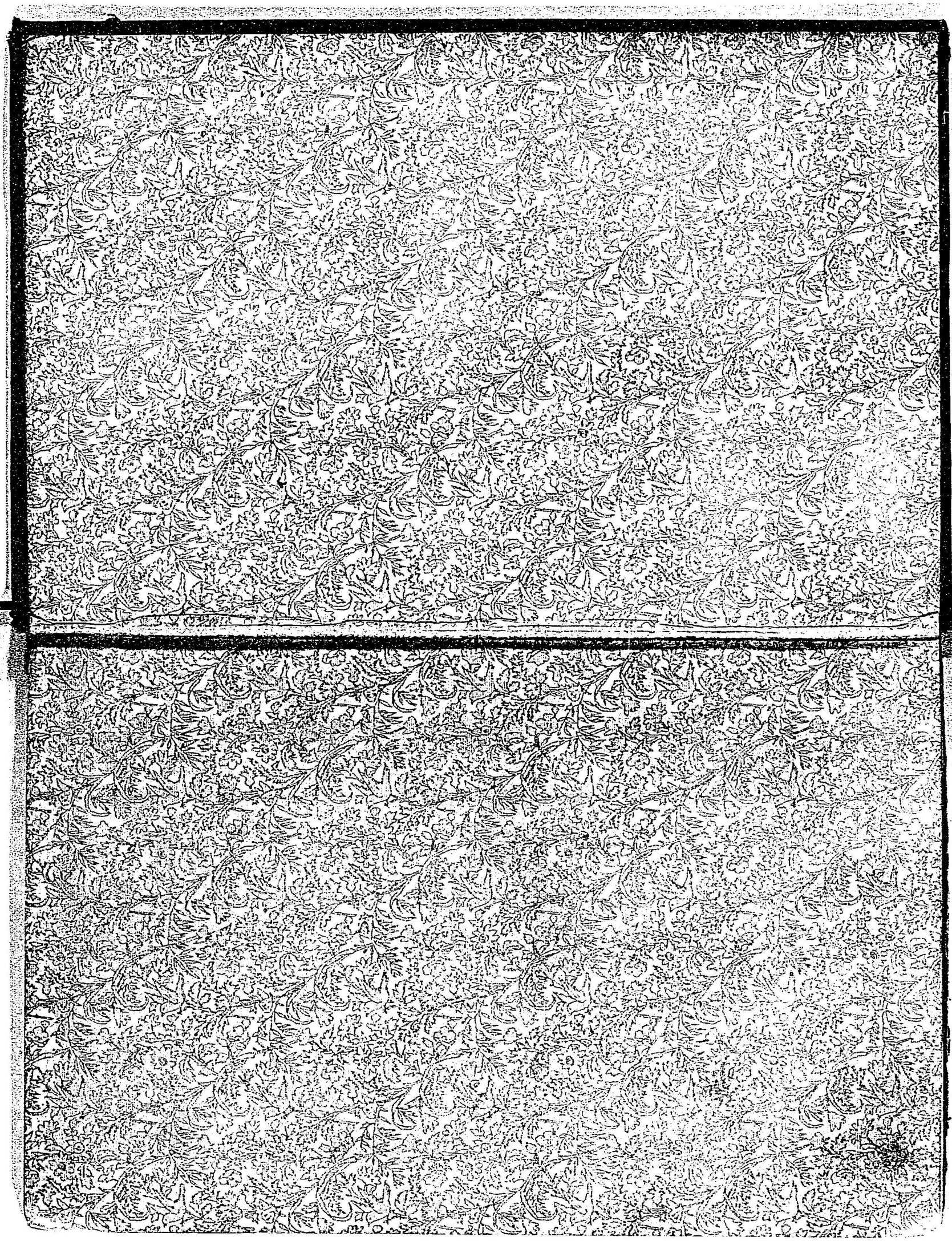
78
69



戸澤姑射
浅野馮霊 共譯



文學士

戸澤姑射 譯

沙翁全集

第五卷

王ア リ

發兌

大日本圖書株式會社

明治三十九年初版

明治
39 11 30
内交

一言

沙翁全集第五卷を刊行するに當り、譯者は江湖の識者諸君、殊に新聞雜誌に批評の筆を執らるゝ評家諸氏が、本集に對し毎回同情ある評言を公にせられ、懇切なる敎誡と奬勵の辭とを與へられたるを謝す。蓋し此種の事業たる諸君の贊助に待つ所大なるは、今更喋々を要せざればなり。譯者は又讀者諸君が眞摯なる研究的態度に謝する所なかる可からず若し研究的態度を以てするにあらざれば、換言すれば只だ銷閑の具に供せむとならば、沙翁全集購讀の如きは、頭をも胸をも痛めざる講談落語の筆記にだも、或は劣る所あるべければなり。

回顧すれば昨秋本集第一卷を發刊して以來茲に一年、此過ぐる一年間

に至るを刊行し得たるは略ぼ譯者等が豫期にかなへり。後の一年間に於ても、之に劣らざるの數を刊行し得むとは譯者等が密かに期する所なり。只だ憾むらくは下根淺才、所謂瓜の蔓に茄子の生らざることを。然れどもせめては出來得る限りの改良を施し、瓜は瓜なりに其最上品を江湖の市場に提供するを力むるを以て庶幾くは譯者が任務と爲さむ。

明治三十九年九月

本篇の譯者

リア王の悲劇解說

(一) 刊行の年月
(二) 書下の年月
(三) 材料の出處
(四) 梗概
(五) 重なる人物の性格
(六) 此劇に對する著名なる評家の言
(七) 該譯稿に就ての注意

(一) 刊行の年月

此脚本の初めて刊行せられたるは、一六〇八年にして、同年内に二種の刻本を出せり。出版者は同一人にして、所謂第一クヲート版第二クヲート版是なり。然れども第二クヲート版は、只だ第一クヲート版の校正を厳密にし、印刷を鮮明にしたるに止まり、肯て異なれる原本に依りたるにあらず。されば第一第二のクヲート本は、其實同一版なりと見るも大なる差支を見ずと云へり。而して此クヲート版は、果して作者、若くはそが書下されたる一座の承認を受けたる上の出版なるや否やは、長へに解決すべからざる疑問なるが、恐らくはさる承認を受けたるにはあらざるべし。即ち作者若くは興行權所有者の干知する出版にはあらざるならむ。

一六二三年の沙翁全集、即ち第一フヲリオ版は、確實なる原本に依れりと稱するものなるが、該全集中に採錄せられたる「リア王」を、右のクヲート

版と比較するに、文字の相違せる點甚だ多く、且つクヲート版に存して、フヲリオ版に全く存せざる文句約三百行あり、又フヲリオに存して、クヲートに存せざる文句約百十行あり。而して此等は何れも沙翁の筆なるべきは、古來の學者の少しも疑を挿まざる所なりといふ。されば「クヲート版」と「フヲリオ版」とは、其原本の出處を異にせるは略ぼ明かなるが、何れが書下し當時の原本にして、何れが作者若くは他人の斧削を經たる修正本なるべきか、將た一方に存せずして、他方に存する文句は、後に附け加へたるものなるべきか、或は後に省きたるものなるべきか、是れ亦た決し難き疑問と知るべし。但し現今世に行はるゝ所の正本は、大抵兩版の脫文を悉く併せたるものなり、本譯篇の如き亦然り。

(二) 書下の年月

前記の第一及び第二クヲート版の表紙には、過ぐる降誕節（クリスマス）セント、ステファン祭日の夜（十二月廿六日）國王陛下の天覽に供へたる趣を記せり。然るに此版は、何れも一六〇八年の發行なるは既に云へるが如し。而して十二月廿六日に興行したるものを、年内に發行せむことは、印刷術の幼稚なる當時に在つて、及びもつかぬ事なれば、こゝに所謂セント、ステファン祭日の夜は、一六〇八年以前ならざるべからず。果然當時の新刊書籍登錄簿中、一六〇七年十一月廿六日の條にナサニエル、バッター（第一第二クヲート版の發行者）なるもの、沙翁作脚本「リア王」の登錄をなし、前年のセントステフハンス祭日の夜、陛下の天覽に供へたるものなるよしを記したり。此登錄に依つて、所謂十

二月廿六日は、一六〇六年なるを知ることを得、故に此劇の書下されたるは、一六〇六年十二月以後なること、となし。

さて又右の書籍登錄簿中、一六〇三年三月十六日の條にハアスヂットと著「奇怪なる羅馬敎の欺瞞云々」と稱する一書の登錄あり。此書中には種々の惡魔の名稱を列擧しありしが、「リア王」第三幕エッヂャー佯狂の條に、彼が自中明かに此書中より引用せる惡魔の名稱數多を含めり。之に依つて「リア王」の書下されたるは、一六〇三年三月以前なること、となし。

此の如く兩極端は全然何等の疑をも插む能はざる程明瞭なり。然れども其兩極端の間約四年あり、此四年の中何れの年月を以て書下しの年月となすべきかに就きては古來異說多し。然らば何れの說が尤も優勢なるべきかと云ふに、近來は一六〇六年說を以て尤も優勢と認むべきが如し、

其理由の重なるものは天覧に供するといへる如き場合は、新作の脚本を用ふるが至當なるべく、又當時さる風習なりければといふにあり。

若し此說を正しとすれば、此劇の書下されし時、沙翁は年齡方さに四十三才（數年）既にハムレット、オセロを作して、悲劇上の手腕益す圓熟せるの時なりとす。

（三）材料の出處

リア王及び其三人の王女に就きての物語は、其起源甚だ遠く、恐らくアングロ、サキソン以前の、ケルト人種の間に起り、口碑としてエールスの山間に傳りしものならむと云へり。而して之が記錄の尤も古きものは、彼のモンマウスのデエオフレイが英國史（ヒストリアアトナム）中の一節なり（一一三五年頃の作にして拉典語にて書かれたるも）。之に次ぎては、アングロ、ノルマン人ウエースが佛文の物語（一一五五年頃の作）、又初めて英文にて記されたるは、十三世紀の初期に現れたるレーヤモンが長篇の詩中に於てとす。之に次いでは十三世紀の末、若くは十四世紀の初に現れたる、ロバート、オブ、グロスターが韻文の野史、殆んど半世紀の後に出でたるロバート、マンニングが史詩、スペンサーが有名なる「フエーリー、クヰーン」中の一節、最後に一五七七年發行のホリンシエッドが史譚等なり。此外散文若くは韻文にて綴りたる史談にして、此物語を載せたるもの數種あり、何れも其結構大同小異なり。又此外既に一五九四年に、書籍登錄簿中に登錄せられたる、エドワード、ホワイトなる者の發行に係る、作者不明「リア王の史劇」ありたり。又一六〇五年にも、ジョン、ライトなる者の發賣に係り、同じく作者不明なる「リア王の史劇」てふ一書の登錄せられたる

ものあり。但しこは前のホワイト發行のものと同一物ならむと云へり。

右の中沙翁が重に根據としたるものは、ホリンシエッドが史譚なるべしとは、多くの評家の一致する所なり。然れども更に直接なる扮本は、寧ろ從來行はれ來りたるリア王劇ならむとは、又勢力ある一說なり。但し沙翁は、此劇に於ては、少しも原本に拘泥せず、チエオフレー以下の諸書の長を取り短を棄て、更に己が空想を以て練り直し、全く新なるリア物語を創作せるの觀あり。而して是れ即ち沙翁が扮本とせるものゝ何れなるかに就き、諸說紛々たる所以なり。從前の物語は其終局何れも悲劇的ならず。リアは佛國に赴き、佛王及びコルデリアの擁護を得、兵力を以て首尾克く本國に還り、再び王位に即き、幸福なる晩年を送るを得たる由を云へり。之に悲劇的終結を與へたるは實に沙翁を以て始めとなす。

沙翁は又此劇に於て、從前より行はれたるリア物語のみを以て其筋となさず、更に之に加ふるに、グロスター伯父子に關する物語を以てし、此相似て而かも其趣を異にせる正副二條の物語を混合し、之を打つて一丸となし、渾然たる一條の哀史を作りたり。而してサア、フヰリップ、シドネイが「アルカデア」中の一語を、人物の名を換へ、又多少の修正を加へて採用したるなりと云ふは、動かすべからざる確說なるに似たり。

(四) 梗概

領土の分配

ブリテイン國王リア、◎在位既に數十年、齡方さに八旬を超えたれども位を讓るべき世子なし、乃ち國を三人の王女に分配せむと

す。此時第一王女ゴネリルは、既に嫁してアルバニー公爵夫人たり。又第二王女レガンは、同じく嫁してコーンウヲール公爵夫人たり。獨り第三王女コルデリアのみ未だ嫁せず、當時フランス王幷にブルガンデイ公より結婚の申込あり、此二人最終の返答を得むが爲めに、恰かも宮中に來り滯在するに會す。さて三王女への配分は、既に內定せるにも拘らず、リアは之を披露する前に、三王女が父に對する愛情の淺深を探らむとの、寧ろ愚にもつかぬ考を起し、三王女を召して告げて曰く、此度の領國分配は、汝等が父に對する愛情の度に依つて多少を決すべし、故に汝等各殘る所なく、父に對する心のたけを、今茲に言明せよと。ゴネリル及びレガンの二人は元來毒婦なり、父に對する愛情などは兎の毛の露程もあるべき理なし、然かも巧言令色を以て、父を思ふ孝心の、此上もなく深き山を、寧ろ聞苦しきまで

に、まつこく飾り立てゝ言上に及べば、リアは愚かにもこを信じて大に喜び、王國の三分の一宛を二人に與ふ。次にコルデリアは、彼が最愛の女にして日頃至つて孝心深く萬づ心ざまも優れて美はしかりければ、此度こそ二人の姉にも優りて、嘸や父を喜ばすべき大々的美辭を呈するならむと思ひきや、彼女は日頃二人の姉の心ざまを知れるが故に、今此仰々しき諛辭を聞きて苦々しさに堪へず、却つて日頃の優しさにも似ず、妾は只だ父に對して子たる義務を盡すに過ぎず、豈に他あらむやと、そつけなく云ひ放つに、リアは大に怒りて憤りの餘り、彼女に與ふべき筈の配分を、二人の姉、幷に其夫に分與し、最早父にもあらず子にもあらず、未來永劫親子の緣を切りしぞとの宣言あり。而してこれより以後、リアは只だ國王の稱號を留むるのみにて、實際の王權及び凡ての內帑は、之を二人の婿に讓り、己れは

一百人の武官を召抱え、之に冊かれて一月毎に、交る〳〵二人が館に赴き滞在し、以て幾くもなき餘命を送らむと披露せり。此時リアが大忠臣ケント◎の伯爵は進み出て、コルデリアの爲めに辨解し、是非共此綸言を撤回せしめむとし一命を賭して諫諍せしかども、遂に其効なく、却つて、リアの怒を增し、五日の猶豫を以て國外追放の刑に處せられたり。此時宮中に滞在せるフランス王及びブルガンデイ公は、導かれて此場に入來りしが、ブルガンデイ公は、コルデリア勘當の原因は、只だ阿諛の辭を述ぶけり。然るにフランス王はコルデリア父の不興を受け、今は身につく配分もなき由を知り、さる條件にては、娶りて夫人と爲すこと能はざる由を云ひて手を引ること能はざりしに在るを知り、乃ち曰く、棄てられて愈よ其美を增し、身につく財寶を失ひて却ていや貴きは彼女なり。彼女其者こそは、何者にも

代へ難き寶にてあれ。予は今程彼女に對する戀愛の焰の熾となれりし事あらず。乃ちコルデリアは予が申受けて、全フランス國の王妃となすべしと、嘯て其まゝコルデリアの手を取り相携へて本國に歸還せり。

かくてリアは約の如く、當夜より直ちにゴネリルが許即ちアルバニー公の居城に赴き、一百人の武官を侍從として滞在せしが、未だ約定の一ケ月も經過せざる中、否な未だ二週間にもならざるに、ゴネリルは早くも倦厭の心を生じ、武官共が亂暴狼藉を口實として、父への待遇を等閑にし、父の顏を見ては態と面を蔽め、或は病に托して父の前に出るとを拒み、己が家臣等にも嚴命して、成るべく疎末の待遇を肯てせしめなど、あるまじき行爲度々に及びたり。

ケント及び　こゝに又ケントは、王命背き難く、本國を立ち去る振して、密

道化の悲運　かに服裝を變じ、一賤奴に身を窶して、アルバニー公が居城に忍び入り、リアに面謁して、己を召使の奴僕と爲し賜はらむことを乞ひしに、王は其朴訥なる言語態度を嘉して、早速其願を聞屆けたり。折しも王は武官を引連れ、狩場より還御早々の事なりしが、ゴネリルが寵愛の執事オスワルドなる卑劣漢、王の前に出て無禮の言動を爲せしにケントこれを不快に思ひ、其場に蹴倒して散々に辱めたるを見、王は此新參の家來が勇氣に感じ入り、これよりして無二の寵幸を與ふるに至れり。蓋し王位と共に凡ての味方凡ての頼みを失ひたるリアが、此世に於ける唯一の味方と頼みとは、今や追放せる此ケントと、從前より召使ひたる道化坊主との二人を有するのみなるに至りしなり。序ながら此道化は他の劇に於ては餘り重要ならざる役を演じ、大體の筋には何等の關係もなきが常なれど、リ

ア王」の場合には、大に其趣を異にし、彼が皮肉なる諧謔の中に、「リア」が二人の姉娘に國を譲り、コルデリアを勘當したるを諷しつゝも、決してリアが身邊を去らず、只管其慰藉に力め、少しも己が勞を辭せざる所、誠にケントに次ぐ大忠臣と云ひ得べき程なり。又沙翁は此道化の諧謔を藉りて、リアが悲慘なる身心の狀態を活寫し讀者に與ふる印象を一層明瞭ならしめたる、例の大手腕の程敬服の外なしだゞ諧謔の語たる其意は譯すべくして其味は容易に傳ふべくもあらず。之が爲め本譯に於ては此寧ろ痛快なる道化が白は、其効力の大に減少せられたるべきは譯者の遺憾に堪へざる所なり。

リア、アルバニー邸を退去す

それはさて置き、リアは娘の待遇の甚だ冷淡に疲勞せる老軀を狩倉よりもたらし歸りつる此夕にも未だ晩餐の

準備もなく、執事は無禮を責てして憚らず、ゴネリルは出迎ひもせざる等閑の擧動に憤激し、ゴネリルを呼出して之を詰問するに、ゴネリルは豫て期したる事なれば、こゝぞとばかりに武官共の亂暴狼藉を並べ立て、今は此まゝには棄て置き難し、以後は彼等の數を半數に減ずるにあらざれば父上の御宿は致し難しと斷言す。リア初めはよもやと思ひしがゴネリルの云ふ所冗談にもあらず、實際の要求なるを知るや、怒心頭より起り、彼女が言行の一致せざるを責め、忘恩背德を罵り、更に激烈なる呪咀の言を爲し、此上は一日も此館に逗留することなかるべし。今より直ちに妹レガンが居城に赴かむと高言し、早速馬の用意を命じ、一百人の武官を率ゐてアルバニー公が居城を出でたり去らむとするに莅み、何事をも知らぬアルバニー公はリアを推留め憤激の因由を尋ね問ひしが、

リアは耳にも入れず、振り放つて出て行けり。元來アルバニー公はゴネリルの毒惡に似ず、至つて明德の君主なれば、ゴネリルが父王虐遇の一條には少しも預り知ることなきなり。さればリアの退去後ゴネリルに向ひ其不孝を責めて假借する所なかりき。

さてもリアは城門の外に出で、先づ今より赴くべき由をレガン方即ちコーンウヲール邸に報知し置くの要ありとなし、草々に一書を認め、之を新參の侍臣ケントに托し、大急ぎにて一足先に彼處へ赴き交附すべきを命じたり。之と同時にゴネリルも豫てレガンと打合せ置きたる事なれば、同じく一書を認め、彼の執事オスワルドに托してコーンウヲール邸へと急がせたり。話變りて、コーンウヲール邸にては其夜リアよりの書面にて、リアの一行程なく到着すべき由を知り、驚き居る所へ、間もなくゴネリル

よりの一書到着、披見すればアルバニー邸にての始終の様子を述べたる上、如何にもして武官の數を減ぜしめむとの提議に添へて、此書面一覽次第、リアの未だ到着せざるに先だち、他處に赴き不在と稱せよとの勸言あり、更に精しき樣子はゴネリル自身間もなく來り會して談合すべしとありぬ。レガンは直ちに此勸言に從ひ、夫コーンウヲール公をも誘ひ、共々に程遠からぬグロスター伯が居城へ赴き、俄かの押懸客となれり。此騷ぎにリアが使者ケント、ゴネリルが使者オスワルドへの返事も即座に與ふることと能はず。何れグロスター邸に落つきたる上の事と、其由兩使者に告げ、兩使者は右返書受取の爲め後よりグロスター邸へ來るべき由命ぜられたり。

抑もグロスター伯とは何者ぞ、彼はリアの舊臣にて、既に高齡の老人なるが、二人の男兒あり、長はエッヂヤーとて嫡子、次はエドワードとて庶子なり。然るにエドワードは無類の惡漢にして、且つ美男子なりたゞ庶子なるが爲め、領土家産を相續すること能はざるを遺憾とし、乃ち奸智を以て父を欺き、エッヂヤーを陷れ、己れ之に代らむとの野望を起し、贋手紙を以て父を欺き、エッヂヤーこそは父を殺して一日も早く其財産を相續せむとの陰謀を企てたりと讒言し、一方には兄のエッヂヤーに向ひ、父上には卿に對し、何等か誤解する所ありて、甚く憤激せられたれば、卿を見付次第譯もなく刃にかけむとはせらるべければ、暫く潛伏せられよと欺きて、父に會合することなからしめ、父の嫌疑益す深く頻りにエッヂヤーの在家を搜索して止まざるに及び、又巧みに欺きてエッヂヤーを逃逃せしめ、其時己れは刃を以てわざと腕に傷け血を出し、

グロスター父子の關係

今しも兄のエッヂヤー再び尋ね來り、又父殺害の陰謀に加入せむことを勸めしが、斷然拒絶するに及び、怒つてかく斬りつけながら逃げ失せたりと稱す。父グロスターはかくと聞きて大に怒り、此上はコーンウヲール公に願ひ、國内到る處の港々に關を据ゑても、彼が行衛を尋ね出し、嚴刑に處せむといきまき騒ぐ處へ、折しも來り合はせしは則ち押懸客のコーンウヲール公並に夫人レガンなり。二人も此頓末を聞いて眞實と思ひ、グロスターの身の上を憫み、不孝者エッヂヤーを尋ね出す爲めには、如何なる方法を取るも苦しからずと告げ、更にエドワードに對しては大に非孝心を賞し、改めてコーンウヲール公が直參の臣下に取立つる由を言明せり。

リア王の門前拂ひ

程なく先の兩使者ケント並にオスワルドは別々にグロスター邸の門前迄來りしが、端なくも二人此處にて邂逅し數回の

問答の後、ケントは否應なしにオスワルドを引出し、決鬪に及ばむとせしに、車怯者のオスワルドは大聲を發して助けを呼びしかば、邸内よりはグロスター夫妻等出來り、二人を認めて爭鬪の理由を訊問せし所、ケントが返答の不遜なるを悪み、公爵夫妻の命令にてグロスターが諫むるをも聽かず、あはれ父王よりの使者なる此ケントを足械に懸け、其儘門前に曝し置きて一同歸館せりさて間もなくの事なりき、リアは彼の道化と一人の紳士とを伴ひ、レガンの後を追うて、グロスター邸へと尋ね至りしが門前にて我が使者たるケントが足械に懸けられ居るを見て大に驚き、レガン等の所爲と聞いて更に大に怪みつゝさて公爵夫妻を呼出して面會し、今宵俄かにゴネリルの不孝不義を鳴らすに、豈にゴネリルの許を辭し、レガンの許へ來り投じたる一伍一什を物語り、ゴネリルの不孝不義を鳴らすに、豈に圖

らむや、レガンは父王に同情を寄すべしと思ひきや、却て姉の肩を持ち、父の心得違なるよしを說き、殊に今夜は豫ての約束の日にもあらず、聞はゞ旅行先にて父上接待の準備もなければ、これより姉君の許へ立還り、今迄の不心得を謝せよと告ぐ。リアいかで斯かる勸告に從はむ、押問答の最中ゴネリルも來り會せり。此に於て姉妹口を揃へて父を攻撃し、武官の數を減じ〳〵て、半數より其又半數、更に進んで十人に減じ五人に減じ、果ては一人をも召抱え置くに於ては、父王の御宿は何れに於ても斷然拒絶すべき由を廣言せり。コーンウヲール公將たアルバニー公の溫良に似ず、凶猛無比の暴主なれば、姉妹に力を協せて王を非難せり。此に至つてリアは憤怒の頂點に達し、折しも夜既に深く、暴風雨將さに至らむとする空模樣なりしにも拘らず、かゝる不孝娘の賓客たらむよりは、野天に白頭を曝すの

優れるに若かずとなし、其まゝ其處を立出で、足袋より放たれたるケントと一紳士とは道を失して、及び道化等を携へしのみにて、行くべき當もなき闇中に突進せり。風はさわ〳〵と木の葉を騷がし、雷鳴電閃遠く至らむとして空合尋常ならざるに、此邊り一面の荒野にて、グロスター邸を除いては、數里四方が間立寄るべき數蔭もなし。

ドーバー落

間もなく暴風雨は襲ひ至れり、ケントと一紳士とは道を失して、今は纔くものの只一人の道化あるのみ、風も吹け雨も降れ降つて吹いて此天地を滅却せよ一新せよと呼叫はりつゝ頭には一片の布をも藏かず、騎り來りたる馬をさへ何時の間にか乘り棄てたり。かくて胸中の暴風雨を外界のそれと戰はしつゝ狂ひ狂ひて狂ひ廻れる中、彼のケントはいかにしてか佛國なるコルデリア、密かに軍を率ねてドーバー港へ上

陸せし由の報道を得、即ちコリデリア、し、ドーバーへ向け直ちに發向せしめたる上、諸方を捜索して漸うリアに邂逅せり。さて告げて曰く今夜の此暴風雨には、熊猥も穴に隠れ、聞を愛する動物なりとも恐れて逃れ潜むべし。まして人間の到底堪え得る所にあらず、幸ひ今途中にて一軒のさゝやかなる小舎を見出し置きたり。せめて彼處へ導きまゐらせ、其處にて一夜を過ごさせ申さむと。此時リアは心氣少しく混亂して發狂の氣味あり。漸々ながらケントに案内させて件の小舎に至り、先づ道化をして中に入らしめしに、彼は忽ち怪物ありと叫びながら出來れり。此怪物こそは、よく見れば物狂ひの非人にして、身には腰の周りに一枚の襤褸を纏ひしのみ、見るも哀れの狀態なるに、リアは一見して同情の念につまされ、汝も娘に家藏を譲つて此の有様に

成下りしかとて、又も不孝娘を呪咀して止まず。さても此非人とは何者ぞ、これぞ彼の父グロスターが嫌疑を受けたる嫡子エッヂャーにて、無實の罪故身の置き處なく、暫く逃捕の恥辱を逃れて、時節を待たむと、さてこそかゝる非人の姿に身を窶し、佯狂の身となり人目を眩ま し居るなりけり。然るに此時松明振照らして此場に尋ね至れる者あり、見ればグロスター の老伯なるが、餘りの御痛はしさに、わざ〳〵御行衛を尋ね、密かに御身を援むべき火と進らすべき供御のある處へ御案内申さむとて來りたりと て、一行と共に非人姿のエッヂャーをも伴ひ、或る百姓家へと案内せり。グロスターは素より此非人が己が尋ねる我子なりとは思ひも懸けざりしなりかくてグロスターは又何物をか求むる爲めとて、暫く此處を出行きしが、間もなく還り來りて云ふリア王殺逆の陰謀を企つる者あり、此處は

危険なれば今より直ちにドーバーの港へ落しまゐらせむ。其爲め乘輿を命じたりとて數人の家來をさへ添へ、急ぎ一行を送り出せり。

グロスターが忠義立及び失明

さてグロスターが此場に臨んで、かくリア王に對し忠義なきも、ケントの精忠には素より比すべくもあらず、且つ其精神ケントの如く明快果斷ならず、之が爲め初めは惡しと知りつゝもレガン等の爲すがまゝに任せ、王の難儀を外處に見なしたりしが、其折しもコルデリア、リア王を王位に復せしめむ爲め、兵を率ゐて早くもドーバーに上陸せりとの內報を得、さては此まゝレガン等の命にのみ從ひ居べきにあらずとて、密かに鹿子エドマンドを呼び此趣を告げ、我はこれより王の御行衛を尋ね介抱しまゐらせむ間、若し公爵夫妻グロスターはと問はゞ不快にてとく就寢せりと答へよと命じ、さて前述の如く松明振立てゝ出行きしなるが、かくと聞きたるエドマンドは內心大に喜び今こそ父の忠義をコーンウヲール公夫妻に賣り己れの立身出世を圖るべきなりと爲し、父が出行くを見るや否や、直ちに公爵の前に至り巨細の情況を告訴せしに、公爵の怒り常ならず汝グロスター此復讐には汝が一命を取らむといきまきつゝ、即座にエドマンドを以て父の後を相續せしめ新グロスター公と爲せりさて直ちに人を派しグロスターが行衛を尋ねしめしに、グロスターは首尾克くリア一行を逃れしめたる所を捕へられ、曳かれて公爵夫妻が面前に引据ゑられたり。

公爵夫妻は憎むべき此老人を有合ふ椅子に縛りつけ、公爵自ら脚を上げて彼が一眼を蹈潰せり。之にも飽かで更に殘る一眼を抉らむとせしに、

公爵が家臣の一人見兼ねて之を諫爭し、遂に己れも斬られて即死せしが、其時公爵にも不治の重傷を負はせたり。然れども公爵は少しもひるまず、グロスターが殘れる一眼を抉出して、遂に之を門外に追放せり。これより先エドワードは、公爵夫妻の好意?)にて、父が慘酷なる處刑を眼前に見むは忍びざる所なるべしとて、ゴネリルを護送してアルバニー公が居城へと赴かしめたれば、彼は此場には居合はせざりしなり。而してゴネリルがエドマンドに對する不義の戀は、此時よりぞ始まりける。レガン將た此美少年に對して一方ならぬ戀慕の情を催しけること淺ましけれ。

兩軍決戰、リア、コルデリア生擒せらる

さてもリア王は、グロスターへと落ち延びぬ。俄盲目のグロスターは、己が門前より追拂はれ、あやめも別かず吟行ふ中、エッヂヤーに遮

迎ひて之に案内せられ、同じくドーバーへと赴き、其處なる海岸の斷崖より身を投じて自殺を圖りしが果さず。尚ほ我子を案内として生死の間に彷徨す。但し此案内者が我子なりとは夢にも知らざるなり。かゝる間にコーンウヲール公は、先の負傷にて死し、後にはレガン、エドマンドと情を通じ、授くるに兵馬の權を以てし、心進まぬアルバニー公及びゴネリル等と力を合せ、急ぎ兵を徵し軍を整ひ、以て佛の侵入軍を迎ひ討てり。是より先佛軍方にては、佛王はコルデリアと一將とを留めて兵を率ゐしめ、己は事情ありて歸國せしが、未だ兩軍相衝突せざりける中、コルデリア、リアと遊近して悲慘の對面あり。然れどもリアは狂亂して前後の辨別明かならず、コルデリア深く之を嘆き醫療を盡して介抱する中、いつか戰闘は開始せられたり。其結果として佛軍は敗北し、リア、コルデリア等エドマンドの手

にて生擒せられ捕虜となれり。勝ち誇りたるエドマンドは、乃ち二人の捕虜を幽閉し、密かに其部下に命じてコルデリアを殺さしめ、以て後日の安全を圖らむとせり。時に戰勝を祝し、併せて後事を談ずる爲めにや、アルバニー公、ゴネリル及びレガン等來り會せしが、其席上アルバニー公はエドマンドに向ひ、予は大逆罪を以て汝を逮捕すべしと云ひ出せり。公は更に辭を勵まして曰く、汝若し此儀に對し異存あらば喇叭を吹いて軍中に求めよ、必ず汝が大逆を證せむ爲めに、單騎汝と渡り合ひ、刃に依て正邪を決せむとするの勇士あらむと。エドマンドもさるもの此場合に逃げ足もならず。さらばとて喇叭を吹いて軍中を尋ぬるに、果して躍り出でたる一勇士あり。エドマンドが大逆の數々を擧げたる上、雙方立上りて刃を闘はせしが、やがてエドマンドを斬り倒せり。エドマンド是に於て伏しながら大

逆の次第を懺悔し、さて汝は何者ぞと姓名を問ふに及びて驚きぬ、是れ則ち微服したる義兄エッヂャーにてありけるなり。

エッヂャーが告白　エッヂャーは如何にして今かゝる場合に出て來りしや、手短かに其次第を記述せむに、彼は盲目の父を伴ひ彷徨する中ゴネリルが佞臣オスワルドに邂逅せしに、オスワルドは懸賞のつきたるグロスターが白髮首をせしめむものと、斬つて懸る所を變裝のエッヂャーに宛てたる艶書あり、封推切つて讀父に仇なす者ざんなれと、却てオスワルドを斬殺し、さて其懷中を探り見るにゴネリルよりエドワードに宛てたる艶書あり、封推切つて讀下せば、夫アルバニー公を殺害し、晴れて夫婦たらむとの陰謀を記したり。こは容易ならざる陰謀なりと思ふにつけても、今更憎きは義弟のエドワードなり、一人の兄を此有樣に零落せしめ、父をさへかゝる悲酸の境遇に

陷れしめ、今又更に不義の密通を責てし、明君の聞えある、アルバニー公を暗殺せむとは悪みても餘りあり。此上は豫め此趣を公に密告し置くの必要ありとなし、乃ち密かにアルバニー公に彼書面を示し、更にエドワードの罪狀を證せむ爲めには、某何時にても罷り出つべければ、喇叭を吹いて御召あれと告げ置きつ、さてこそ戰爭も一先づ英軍の勝利に歸したる此日を以て、アルバニー公が右の如くには計らひしなりけり。

終結

大悪漢エドマンドは此の如くにして倒れぬ。かゝる間にレガンは先刻より姉ゴネリルの爲めに毒を與へられ頻りに不快を訴へ居しが遂に空しくなりぬ其ゴネリルさへエドマンドが罪狀の發覺につれて身の置處なくて自ら生害に及びぬ。かくと聞きたるエドマンドは、虫の息ながらさては三人諸共に結婚の場に登らむとてこれも程なくみ

まかりぬ。みまかる前コルデリアを殺害すべき旨一人の部下に命じ置きたる次第を白狀せしにエッヂャーは急ぎ二人の捕虜を幽したる場所に馳せつけしが、時既に遲れぬ、コルデリアは縊られて既に死し、狂亂のリアは其屍骸を懷いて悲嘆に暮れ、怨恨憤慨交も至りしが遂に憤死の慘を見るに至れり。

さて然らば彼のグロスターは如何にか成りし。彼はエッヂャーが喇叭の召に應じて出づる時、若し誤つてエドマンドが爲めに殺さるゝこともあらばこれが永の訣ならむと思ふより、初めて父に向ひ己が何物なるやを告げ、今迄艱難辛苦の一伍一什、さては今よりかく〳〵の次第にて、決鬪の場に上る趣を明かせしに、さらでだに弱り果てたるグロスターは感憤の餘りこれも其場に空しくなれりしなりけり。

是に於て、今は生殘れる者僅に、アルバニー公、ケント伯及びエッヂャーの三人あるのみ。此三人泣の涙にて此等の死者を葬り。英國の王位には、アルバニー公が遂に上せられむとして此悲劇は終りぬ。

(五) 重なる人物の性格

沙翁が創造せる人物中の難物の一なり。先づ彼が此劇に現れリア王たる時は、既に八十才の高齡にして、其壯年時代は如何なりけむ、單にゴネリル、レガンが白中に短慮一徹氣の變り易き方なりし由を云へるあるのみ。其治世は如何なりけむ知る由もなし。而して彼は舞臺に上り早々不可解の行爲を爲せり。即ち三人の娘に領國を分配せむとする其方法として、父に對する愛情の深淺を口頭を以て表現せしめむとせし如

き、眞面目なるか洒落なるか、隨分不思議なる擧動といふの外なし。眞面目にしては除りに馬鹿々々しく、洒落にしては其結果が除りに殺風景なり。これに就きては、古來批評家の間に種々の議論のある事なり。或は此時既に半ば發狂し居りしならんといふものあれど、沙翁は初めより狂者として取扱ひしとも思はれず。さればとて常識全き人間とも思はれず、兎も角知力に何等か人並外れたる點ありしには相違なし。思ふに積る年齡の結果と、性來の心の傾向とが、境遇と相合して此の如き不思議の性格を作りしといふを以て穩當の所見と爲すべし。されど彼は其知力の人並外れたる如く、又老人としては人並外れたる勇氣と變り易き、されど强き意志とを有せり。其最愛のコルデリアを勘當して、ケントが一命にかけての諫言をも耳に入れざる如き、又グロスター邸を脫出して、暗夜暴風雨の中に突

進するが如き、何れか大なる勇氣と強き意志とを表明せざりける。之を單に老の一徹、若くは老人の冷水と見るは除りに淺薄に過ぎたらずや。第三幕、暴風雨の中を暴れ廻りてよりは、全然狂者となり了んぬ。されど其狂暴の中、無意識に過去の記憶を取留もなき諧語の中にほのめかして、二人の娘が大逆を讀者の胸に印象し、現在の彼が身の上の如何に哀れなるかを思はしむる所、諧語ならでは却つてかゝる感動を惹起されざるべし。ドーバー附近の地にコルデリアと會せる時の如き、狂亂の中一條の正氣（しやうき）の混ずるありて、あはれを引くこと多し。而かも吾人をして坐ろに英雄の末路を思はしむるは、彼の大なる勇氣と意志との、自然の嵐人情の嵐に、遂に吹折られたるを認むればならむか。

所詮狂者は不可解なり、リア王將た此理に漏るゝことなし。但し彼は所

謂發狂以前より既に不可解の人物なりき、矛盾多き性格なりき、惑なるが如く狂なるが如く不具なるが如き性格なりき。然るにも拘らず、全躰に於て吾人はリアの大なる人物深刻なる性格なるを認めざる能はず。常人の手にしてかゝる矛盾あるかゝる不可解の人物を描きたらば、思ふに何等の性格をも爲さぬならむ。然れども沙翁がリアは慥かに一種の性格なり、質に大なる性格なり。是に於てか普通人の作ならば、只だ矛盾なり不可解なりとして棄てらるべきを、沙翁がリアは古來評家が其刀の利鈍を試すべき解剖臺として用ゐらるゝなり。

コルデリア　凄く恐ろしき此物語の中に、心身の苦痛煩悶を描きたる畫面の中に、神女の如き優にやさしき一女性の現れ出づるをコルデリアとす。されど吾人は、いかにも天使の雲間に現れたるを只一目仰ぎ見た

るが如く、慥かに天使來れりとは認るものから、其容貌風采の詳細を問はるれば、忽ち辭窮して答ふること能はざるべきが如く、コルデリアの性格に至つても、只だ其暖かさを感ずるのみにて巨細の性狀に就いては之を理解すること決して爾かく容易にあらず。譬へば黑雲の後に一點の星光閃めくよと見る間に、忽ち暗中に沒し去るが如く、何人も此性格の美にして優なるを感ずべきも其印象たる深大なれども精確ならず。試みに批評家若くは一般讀者に向ひて、コルデリアの如何なる人物なるやを問へ。彼等は萬口一齊に、其美はしく描かれたるを答ふるならむ。然れども巨細の點に至つては異說紛々たること、沙翁が性格中此右に出づる者尠なし、是即ち此性格は、極めて簡潔に描寫せられ、且つ其舞臺の上に留まること甚だ短ければ、觀察は只管其容貌の觀察にのみ忙はしく、其內部の心的狀態

に至つては觀察の餘裕を留めざる所以の證なり。

右は沙翁劇女性の研究者として有名なるジエームソン夫人がコルデリアを評せし言の一節なるが、げに此劇を一讀したる時、吾人がコルデリアに對する所感は誠に此の如くならむ。夫人は更に所謂「巨細の點」に就き說明すらく、蓋しコルデリアが大體の性格は、人間行爲の二大原理、即ち眞實を愛するの情及び義務の觀念を基礎として成立するが如し。但し此等のものも之を抽象的に露骨に表現せば、寧ろ冷酷なる感を與ふるなるべし。故に沙翁は之を包むに女性特有の貴重なる美質、即ち鋭敏なる感情と楚々として人を動かす底の愛情とを以てしたり云々。誠に彼女が人となりは其眞實を愛し虛僞を憎むと同時に、義務てふ觀念の著しく發達せる精髓にして、外部は常に溫乎たる

容顔長なへの春風を湛へ萬事に優美なる感想を寄するらしきやさしの婦人なり。ジエームソン夫人は、更に彼女が他の優美なる性質を列擧せる上、彼女をして彼女たらしむる性行上の特質を擧げて曰く、生來の寡言、内氣の性分、沈靜なる擧止風采、及び凡ての感想凡ての言語凡ての擧動に一貫せる謙讓の風、此等は常に彼女が外部の表情に依つて彼女が内部の感情を悉く吐露せしめざらしめたり云々と。而して夫人は最後に一括して曰く、若しコルデリアが地上の何者にか似通へりとせば、そは伊太利の古畫に於ける聖母（マドンナ）の圖なるべし。神々しき聖母の肖像が、人間界と全く相絶たざる所以は、其子たる基督に對する母の愛若くは母の悲みにあり。同樣に若しコルデリアにして父に對する孝心、被りたる災害、苦痛及び涙等を以て此地上の人情と相關することなかりせば、彼女は人間とも思はれぬ

程神々しく、取りも直さず一個の天女となり了りしならむと。

揃へも揃へし毒婦ながら、其毒の質と度とに多少の相違あり。ゴネリル及びレガン（ゴネリルはレガンよりも所謂胴性骨太く、沈着にして、一旦決したる事は決して飜さぬ底の意志あり。レガンは姉に比すれば何處となく規模小なるが加し、尤もグロスターの眼を抉る一段に徴すべきが如く殘酷を好むが如き性は寧ろ姉に優れる所あらむ。然れどもレガンは父に對しての行爲を内心遺がに疚しく感ずるの時あるが如く、リアがゴネリルへの呪咀の語を聞いて戰慄し、又グロスター邸の門前より父を荒野の闇中に突進せしめたる後の如き、幾分逡巡の態あるを表せり。而してゴネリルに至つては少しも其事なし。彼等姉妹がエドマンドに對する戀慕に至つては、寧ろ凄き恐ろしき感を與ふ。ダウデン氏が之を評して、彼等

の戀は彼等の惡よりも物凄しといへる、誠に適評といふの外なし。其最期に至つても、レガンは他殺にて死しゴネリルは自殺に依りしが如き、何處迄も二人の特性を發揮せりといふべし。

エドマンド　沙翁が描出したる惡漢中「オセロ」のイアゴーに次ぎ鮮々たるものなり。然れども彼はイアゴーの如く、別段是ぞといふ目的もなきに惡事を働くこと、即ち惡の爲めに惡を爲すことなし。是れ其惡黨とし、てはイアゴーよりも小にして、彼程には恐ろしからざる所以なり。要するにエドマンドは何處迄も自己の立身出世を目的とし、自己の利益を目安とし、其手段として惡事を行ふものなり。故に若し彼が地位にして彼が如く逆境に立たず、グロスターが嫡子にして、おとなしく待つ中には何時かグロスター伯爵の爵位財産は其頭上に落來るものと定まり居たらむに

は、彼は何等の惡事をも爲さゞりしやも知れざりしなり。之を如何なる境遇に置くも必ず惡を爲すに相違なきイアゴーとは大なる相違なり。只だ惡事を決行するの手腕に至つては、彼も是も殆んど同等の程度に在りと見るを得べきか。

エッヂヤー　東洋流の孝子なり、之を二十四孝中に加ふるも、少しも其調子外れなるを覺えず。如何なる虐遇を受け、如何なる逆境に立つも、天を恨みず人を恨みず、まして父を恨めしと思ふことなく、靜かに天の時を待つといへる心懸、寧ろ意氣地なき迄なる、エドマンドとは正反對なり。

ケント及びグロスター　前者は是も東洋流の大忠臣にして、剛直誠忠而かも智仁勇を兼ね備ふるの豪傑なり。君を諫めては一命を惜まず、主君の難儀を聞いては、身を賤奴に落してまでも奉公の誠を

抽んづる身の覺悟、見るも心のすが〳〵しきを覺ゆ。グロスターに至つては、ケントに及ばざること甚だ遠し、彼は、現在の我子を視るの明なく、主君リア王が闇中に突進するを見ても、コーンウヲール公等に對し、徒く迄之を爭ふの勇なく、コルデリア上陸の報を得るに至つて、初めて膵の緒を固むるに至れる如き、動もすれば首鼠兩端を抱けるにあらずやと思はるゝが如き欠點あり。盲目の身となりて吟行するに及びても、生死の境に立ち迷ふなど所詮此人物の大ならざるを見む。然れども兎にも角にも一命を賭してリア王をドーバーに落して以來の彼が忠義は賞讃の價あり。又其境遇のリアに似通ひたる哀れ深しさるにも拘らず、かく相似たる境遇に流浪する二人の老人を比較すれば、狂せるリアの狂せざるグロスターよりも遙かに偉大なる樣に覺えらるゝ是非もなし。

(十六) 此劇に對する著名なる評家の言

古來第一流の評家にして、此劇を以て沙翁が最大傑作なりと考ふる者一人なからず。ハヅリットは之を「沙翁劇中の白眉」と稱し、シエレーは「世界中に存在する劇文學の最も完全なる標本なり」と斷じ、テン、ブリンクは「大躰より云へば沙翁が作中の最大作品なり」と讃し、現存の沙翁學者中にては、ダウデン氏は「チユートン人種の天才が作爲せる詩中の最大唯一の成功なりと呼び、クレーグ氏は「一篇の劇としては『オセロ』を以て此上に置かむと欲す、然れども此篇中の或部分に於ては、沙翁は自己を超越して幽玄の境地に達し、あらゆる文藝の最高頂に觸れたり、從つて沙翁は此篇に於て其最大技能を發揮せり」と論ぜり。

前記のハズリットは、又此劇を評して、此劇其者若くは此劇が人心に與ふる感動を解釋せむとするは寧ろ僭上の沙汰なりと迄尊崇せり。又チャールス、ラムは此劇は之を舞臺に演ずると全く不能なる由を說いて曰く、「舞臺に演ぜらるゝリアを見るは、即ち雨の夜に門外に突放たれ杖に縋りて舞臺の上を跼跽き歩く一老翁を見るは、只だ痛ましく、見るも哀れなりとの感動の外何物をも與へず。吾人は只だ彼に屋根を與へて救助し遣りたしとの念を起すに過ぎず。而して是れ予が此劇の演ぜらるゝを見る毎に起す所感の凡てなり。所詮沙翁がリアは之を舞臺に演ずること能はざるなり。舞臺の大道具は、到底實際の暴風雨を摸する能はざるが如く、如何なる俳優もリアを摸すること能はざるなり。之に比すればミルトンのサタン若くはミケランジエロが異形の怪物を演ずる方がまだしも容易の業ならむ。リアの大なるは其外形にあらずして其内部にあり。彼が憤怒の爆發は其恐ろしきこと火山の如く、樣々の實を藏する心てふ大海を覆して、其深き底を瞥見せしむ。即ち眼前にさらけ出さるゝものは彼が心なり。此場合彼が血肉の袋たる體軀の如きは一顧の價値もなく、彼自身すら之を忘却し居れるなり。然るに舞臺に演ずる時は、吾人は其肉體上の哀れなる狀態を見るに過ぎず、如何なる科か之に相應しきものあらむ、如何なる聲も如何なる眼付も之とは相關せざるなり云々」と。

彼國の學者が如何に此劇を珍重なるかは右にて其一班を推するを得むか。

(七) 該譯稿に就ての注意

リア王の悲劇

譯者は現今行はるゝ普通の正本（即ち學校用の爲め特に或部分を抹殺したるものにあらざる）に含まるゝ凡ての白を譯出する覺悟なれども、中には甚だしく尾陋なる文句、若くは語呂或は同文異義を基とせる滑稽の語にして、之を除くも何等の風致を害せざるものゝ如きは、之を強ひて拙なき日本語に飜すの愚なるを思ふが故に、時に之を省略せることあり、乞ふ讀者之を諒せられむことを、然れども此の如きは素より之を九牛の一毛といふも妨なき程の少數なり。

譯者識

リア王の悲劇

第一幕

第一場 ブリテイン國王宮内大廣間

（ケント伯、グロスター伯及びエドマンド（グロスター伯が庶子）登場）

國王殿下には、コーンウォール公（第二王女レガンの配）よりも、アルバニイ公（第一王女ゴネリルの配）を御寵愛あらせらるゝやうに御見受申しましたが、

グロスター伯　いかにも従來は、其樣に御見受け申しました。然るに此度、御領國御配分の御模樣にては、何れの公爵を、取分御寵愛あるとも申されませぬ。誠に御平等なる御取捌き、どう詮義致しても、御雙方の御配分に、優劣は附けられませぬ。

登場人物

リア	ブリテイン國王
佛國四王	
ブルガンデイ公	
コーンウォール公	レガンの配
アルバニー公	ゴネリルの配
ケント伯	
グロスター伯	
エツヂヤー	グロスター伯嫡子
エドマンド	同庶子
クラン	廷臣
オスワルド	ゴネリルが執事
老人	グロスター伯領内の百姓
醫官	
道化坊主	
隊長	エドマンドが部下
紳士	コルデリアの侍從
軍令使	
コーンウォール公の從僕大勢	
ゴネリル	リア王女
レガン	同
コルデリア	同
此外リア麾從の武官、役人、使者、兵士及び侍從等大勢	
場所	
ブリテイン國	

ケン　これは御令息ては御座らぬか。

グロ　いかにも、某が引受け養育致せし者てムれど、我が子と申すもお恥かしさ。餘り赤面致したので、今ては却て面の皮が厚うなりました位。——此外にも一年年長な、嫡當の子息がムりますが、それとても愛しいとは思ひませぬ。此奴は少々厚顔ましく、呼びもせぬに婆婆へ出た不屆者。只だ母親がいとしらしい者でムつた故、遂我子とも認めます次第てムる。（エドマンドに向ひ）こりや、エドマンド、其方は此殿を御見知り申すか。

エドマンド　否御見知り申しませぬ。

グロ　ケントの伯爵で入らせらるゝ。拙者が乘々御厚情に預る御方、以後は能く心得居よ。

エド　何卒此後とも、御目懸けられまして下さりますやう。

ケン　イヤ某も心易く、親密に交りたい願ひ。

エド　不肖ながら御厚志を辱かしめぬ樣、心懸くるでムりませう。

グロ　實は只今迄九年間、外國へ遣し置きましたが、又ぞろ出懸けさせる心算にムります。——ヤ陛下の出御てムる。

と合圖の喇叭にて、王冠を捧げたる侍者一人、續いてリア王、アルバニー、コーンウヲールの兩公、次にゴネリル、レガン、コルデリアの三王女、及び侍者大勢登場

リア王　グロスター卿には、佛蘭王、ブルガンデイ公、御二方の御側へ伺候し、御相手を致されい。

グロ　畏りましてムりまする。

とグロスター及びエドマンド退場

リア　さて此間に一同へ申聞ける一事がある。それなる地圖を此方へ遣せ。見られよ、予は王國を此通り三分致せしぞ。既や老躰の政治に携はり、心勞致すも大義なれば、齢若き者に萬事を譲り、身輕になつて彼世の旅の準備を致さむ心構ひ。いかに愛婿コーンウォール、同じくアルバニイ能く聽かれよ。後日の悶着を防がむ爲め、三人の王女への遺産分配を、只今此席にて披露致さむ。まつたフランス王、ブルガンディ公の兩人には、乙姫コルデリアを懇望にて、久しく宮中に滯在致されしが、今日愈よ此席にて、何分の返答に及ぶべし。さて三人の王女達――今日以後、此父は王位を去り、領内の政治、國事の懸念を悉く抛たむ覺悟なるが、さてそれに就き汝等三人の中、此父を愛すること尤も深きは誰なるぞ、同じ親子の間なれど、孝心優れし者にこそ、一の賞與は許す

けれ。先づは姉姫ゴネリル（ゴネリル）より、心中を語つて見やれ。

ゴネリル　父君を思ひまつる妾の心は、詞には盡されませぬ。廣い自由な此世界にも、物を見る兩眼にも、優して大切な父上樣。何のやうに貴い物でも、例へば健やかに美しう、萬人の尊敬受け、此世樂しい一身なりとも、父君には代へられませぬ。恐らくこれ程に、父を思ふ子はあるまい、これ程に子に思はれる父もムりますまい。ぼんに此愛情の深さには、詞も聲も薄れ果てう、父上樣を思ひまつる心のたけは、先づ此樣てムりまする。

コルデリア（傍白）此コルデリアは、ハテ、何と申上げう、心て思ひまつるばかり、口に出してはえ云ふまい。

リア　此線（地圖中に劃したる線）から此線迄、茂林沃野續きあひ、豊かなる河もあり、

廣やかな牧場もある、此狹からぬ領土をば、悉皆其方に讓るぞや。アルバニイと其方との、中に生るゝ子々孫々に、永く傳へて有つが宜い。—さて次に仲姫は、彼のコーンウォールが妃なる、いとしのレガンは何とてあるぞ、云うて見やれ。

レガ　妾とても姉君と、同じ枝葉に連なる身。不束ながら姉君に、少しも劣りは致さぬ存念。眞實姉君の御詞は、妾が父上を思ひ奉る其心中を其儘に、申したやうてムりますが、少々物足らぬ處もムります、と申すは此妾は、身に泌み魂に徹つて、嬉しいと思ふ事、樂しいと思ふ事ても、目の敵と推退けて、たゞ〳〵父上にお仕へ申す其事のみを、何寄の樂みと致す事てムります。

コル　（旁白）何と申上げう詞もない、コルデリアは哀なもの、さはさりながら

舌頭より、深いは妾が心の中。

リア　おゝ其方にも子々孫々、美はしい此王國の、三分一を與ふるぞよ。廣さといへ、價値といへ、豐かさといへ、ゴチリルが配分に劣りは致さぬ。—さて此上は乙の姫、末子とはいへ、親は末とも見ぬ娘。佛蘭西の葡萄（佛王を云ふ佛國は葡に富む故爾云ふ）とブルガンデイの牛乳（ブルガンデイ公を云ふ牛乳は同國の名產なる故爾云ふ）とが、各所望と申さるゝ。其方は姉達の配分より、一際豐かな殘り三分一を受けう爲めに、何と云やるぞ、語つて見やれ。

コル　申上げう詞もムりませぬ。

リア　詞もない。

コル　ムりませぬ。

リア　無いものからは何も出ぬぞや、云うて見やれ。

コル　殘念ながら心中を、口に出すことは出來ませねど、妾はたゞ父君を、子たる道に外れぬやう、思ひまつる斗りでムります。格段にどうかうと申すことはムりませぬ。

リア　コレ〳〵何と、コルデリア、少々詞を改めねば、配分を失すであらうぞ。

コル　生の御恩に愛育の御大恩、其大恩の父君に、盡すべきだけを盡すが妾の義務。さればこそ、父君を愛し進らせ、尊敬し進らせ、仰には背かぬやう從順に致しまする。作去姉君のやうに、何事も打棄てゝ、たゞ父君のみを思ひまつるが定ならば、姉君には何故夫の君を御有ちなされます。若し此身も、やがて人妻になるならば、此身の愛情心遣ひ、身に負ふ義務の半分は、夫る殿御に捧げねばならぬ筈。姉君達の仰せ

のやうに、何事も打棄てゝ、父君ばかりを愛しながら、良人を有つことは、此妾には出來ぬ事でムります。

リア　それは其方の本心よりか。

コル　本心よりでムります。

リア　若い身そらで不屆な。

コル　若い身そらではムりますが、父上、眞實を僞るは好まぬ此身。

リア　宜いわ、然らば其眞實を父が唯一の遺産と致せ。大日輪の光明も、地獄の秘密、夜の闇、人間の生死を司る、天上の星も照覽あれ。予は今より其方への、親たる義務を拋ち、血緣のよしみを斷ちたるぞ。未來永劫父でもない、子でもない。今より後予が胸には、音に聞くスキジアの蠻族も、口腹の慾を充たさむ爲めに、我兒を膳に上す食人鬼も、昔し予が女

なりし、其方も差違はないぞや、

ケン　御待ち下され殿下――

リア　默れケント、逆鱗には觸れぬものぢや。予は彼女奴を秘藏に致し、彼奴が優しい介抱に、晩年を送らむ覺悟なりしぞ、――往け〳〵目通りを下れ〳〵（此の一句はコルに向ひての白）――然るを今彼女奴をば、予が胸中より勘當したれば、此上の安心立命は、だゞ墓場にこそ求むべけれ――佛蘭王を此方へ請ぜよ。誰ぞ參つたか――ブルガンデイ公を御呼び申せ――コーンウヲール、アルバニイの兩人には、二人の姫の配分に、更に殘る三分一を分配致せ。彼女奴には、眞實とやらいふ傲慢心を、唯一の聟金に取らして遣はすさて又汝等兩人へは、共同に國家の政權、其外凡て王位に伴ふ權勢を讓り渡す。其上は予は汝等より扶持を致させて、

一百人の武臣を召抱へ、それを引具して、一月毎に替る〳〵、兩人の居城に赴き逗留致さむ。即ち此身は、たゞ國王の位階尊號を留むるのみにて、政權は素より國家の收入、萬般の政道悉く、汝等兩人に依托致す。其證としては、これなる王冠を兩人にて分配致せ。

ケン　御待ち下され殿下、恐れながら上一人として尊敬し奉り、父とし愛し奉り、主とし從ひ奉り、一國擁護の大君として、朝夕の祈禱にも、御名を唱へぬ事もなかりしを――

リア　既や引絞つたる大弓は、其儘には收まらぬ。箭表を退いた〳〵。

ケン　某が胸の中央を、射透される迄も退かれませぬ。殿下にかゝる御狂暴の御擧動ある上は、此ケントに是程の無禮もなくてやは。殿下、是は如何なる思召にてムりまするぞ、人君諂諛に掩はるゝ時、人臣諫諍を恐

るゝと御思召遊ばしますか。君徳暗愚に傾かば、臣義直言を憚らぬ例。殿下、何卒只今の御意を御改めなされて、熟と御叡慮の後、徐りに軽々しき御沙汰を御止めなされ。某は一命を賭して奏し上げまする。乙姫君には殿下を愛し奉ること、決して人後に落ちさせは遊ばしませぬ。中盈つれば鳴る音低し、其聲大ならざる者は、心空しき者とは申されませぬ。

リア　黙れケント、命が惜くば黙り居らう。

ケン　某が一命は、殿下に仇為す者共を、平らげむ為めに捧げた命。殿下の御為め故ならば、失ひしとて口惜しいとも思ひませぬ。

リア　目通りを下れ〳〵。

ケン　イヤ御目障りではムりませうが、中々御前は下りますまい。御覧直し下さりませ。

リア　アポロの神も見そなはせ——

ケン　アポロの神も見そなはせ。殿下如何に諸天諸神を證に誓はせ給ふとも、それは無益。

リア　ヤア不屈者、無禮者。

アルコーン　殿下、暫く〳〵。

リア佩劍に手を懸ける

ケン　いや御勝手に遊ばしませ。醫師を斬つて、謝禮は病氣に御遣はしなさるも御隨意。——只今の御沙汰を御取消し遊ばされずば、某が息の根の續かむ限り、叡慮當を失へる由を、申續くるてムりませう。

リア　卑怯者よつく聽け。汝眞實君を思ふ誠忠あらばよつく聽け。予に一

旦の誓約を破らしめむとし、傲慢無禮の擧動もて、予が計らひに嘴を容るゝ不屈奴。是れ予が位予が天性の忍ぶを得ざる所なり。依つて予が權力を汝に思ひ知らせむ爲め、此處罰を命ずるぞよ。即ち今より五日の猶豫を與ふるにつき、其間に浮世の波風凌ぐ準備を致せ。さて六日目には、その忌まはしき背を、我が王國に向けて退去致せ。十日の後に至り、汝の躰軀若し予が領土内に殘り居らば、即座に汝が命はないぞ。往け、綸言は出でゝ還らぬぞよ。

ケン　左らば殿下、御暇を申上げまする。あゝ殿下かくおはす上は、自由は此土を去り、流浪流轉の世の中と、成り果つるは眼のあたり——（コルに向ひ）——正當な御心を正當に仰せられたいとしの姫君を、おゝ神々も擁護あらせ給へ。——（レガンに向ひ）——して姉姫達には、彼の立派な御詞を、行爲の上に

て證明させ給はむことを、陰ながら祈りまする。さて御列座の御方々、ケント奴はかくの次第で、只今御暇を申上げまする。此上は新たなる國へ參り、今迄通りの頑固一徹の擧動を續けまする所存でムります。さらば。

喇叭の音にてケロスタア再登場、フランス王、ブルガンデイ公從者火燵いて登場

とケント退場

ケロ　申上げます。フランス王、ブルガンデイ公の御入りでムりまする。

リア　先づブルガンデイ公に御尊ね申す事あり。公にはこれに在すフランス王と、不束なる末姫を御所望に及ばれしが、彼女が身に附く配分は、幾何程御所望あらせらるゝぞ。若し又御所望に叶はずば、全く御手を引かせ給ふか如何でムる。

ブル　至尊殿下、某に於いては、殿下の降し給はるべき、御配分の上を所望は致しませぬ。さればとて、給はるべきを、御減額も成されますまい。

リア　聽かれよブルガンディ公。是迄は愛しき者にてありし故、此身とても其樣に思ひ居しが、只今姫が相場は下落致した。見られよ其處なる立姿。あの小さげな躰軀の中に、何ぞ取柄があるか。若くは父の勘當受けし外に、身に附く物もない、其裸躰が、御氣に召すとあるならば、御隨意に御引取り下されい。

ブル　何と御返答申上げて宜しいやら、

リア　氣立といへば彼の通り。新たに父の惡しみ受け、身につくものは父の勘氣、諸神を證人に親子の緣を斷たれし女、賴る友もない彼女奴を、ハテ公には取るか棄つるか如何であるぞ。

ブル　御免下され殿下、其樣な條件では、御返答は申上げ兼ねまする。

リア　然らば御棄てなされい。彼が身につく富とては、只今申せし通りに相違ムらぬ。——（フランス王に向ひ）フランス王にも御聞下され、自ら憎しと思ふ女をば、王妃に勸め申す如き、失當の擧動は、日來の御厚誼に對しても致されず。此上は何卒此樣な、造化自然の人情にも戻るやうな、惡き女子などには御目縣けられず、他所外の淑しい女子を、御求めなさりませい。

フランス　不思議なる事を承り申す。遂今の今迄も、父殿下が掌中の珠、御自慢の種御老後の慰藉と、御寵愛を專にしたる姫君が、時の間に其御寵愛を失ふとは、こりや一通りならぬ、奇怪な擧動を致されたか、但しは父殿下が口癖に仰せられたる御愛情が、譯もなく俄かにさめ果てたも

のと見ゆる。乍去此姫君に、左樣な擧動のあらうとは、人力の及ばぬ奇蹟にてもあらば知らず、妾りに信ずることは、道理の許さぬ所でムる。

コル　父上樣に、推して御願がムりまする。――此妾は心にもない事を喋々り立てる、滑かな、すべりの善い、辯才がムりませぬ故、思ふことは口に出さぬ間に、先づ行爲に出す習ひ――其處を御推了なされて、父上樣より、妾が此度御機嫌に逆らひ、御寵愛を失ひましたも、大それた惡事惡業不貞操い不品行、其外尾陋な過失などの爲めてはなく、無くもがなの才氣足らず、憐みを惹く眸もなく、そのため御寵愛を失ひたれど、よくぞ有たざりし辯舌をも、欠ける故てあることを、御披露なされて下さりませ。

リア　えゝ寧そ其方といふものが、此世に生れて來なむだなら、此樣な不

快な、思ひは致すまいに。

フラ　さてはそれだけの理由てムつたか。心の中を云はむとして、云はずに過ごす、其つゝましい天性故、此樣な御不興を蒙りしか。ブルガンデイ公には、姫君を如何なされまする。戀を離れた慾德を雜ふるは、眞の戀とは申されぬ。妃に有たせ給ふや如何に、身につく實はあらじとて、姫こそ實におはすものを。

ブル　リア殿下に申上げます。いつぞや御口づから仰せられた、御配分を御遣はし遊ばしませ。さらば早速コルデリア姫は、此某が手を取て、ブルガンデイ公爵夫人とかしづきまする。

リア　イヤ配分は遣はされぬ。既に誓迄も立てたる上は、此決心は動かされぬ。

ブル　然らば氣の毒ながらコルデリア姫。それ程迄に、父君の御不興を受けられては、某とても御手を取ることは叶ひませぬ。

コル　御心安う思し召せ、身につく寶への戀ならば、妾とても公爵夫人には、なりたうもムりませぬ。

フラ　おゝ美はしのコルデリア姫、財寶を失ひていや貴く、棄てられて却て光を增し、憎まるゝ程愛らしい、其淑德を持參として、御身を某所望致す。棄てたる者を拾上ぐるに、申分はよもあるまい。おゝ方々が冷やかな待遇故、我が戀のかく燃え立つとは、思へば不思議、殿下、着のみ着のまゝて御棄てなされた姫君は、某が拾ひ上げて妃と致し、美はしき全フランス國の女王とかしづきまする。水臭いブルガンデイ國の公爵共が、如何なる寶を以て、代へやうなどと申されても、此尊き姫は、い

かないかな渡されぬ。此上はコルデリア、さもしい心の方々に御暇を告げ、此處を去つて樂しき國へ、いざ諸共に差して參らう。

リア　フランス王には姫が手を取らるゝとな、御隨意に王妃となさるが宜い。かやうな女は女でない、顏さへ重ねて見たうもない。訣別の詞も祝福も、與へは致さぬ、此儘去れ。——いざ參らむ、ブルガンデイ公。

と喇叭の音、フランス王、ブルゴーニュ、コルデリアの外一同退場

フラ　いざ姉君達に御暇を。

コル　申し、父上樣が御鍾愛の姉君達、此上げます。御兩方の御心は存じた妾、乍去妹の分として、彼是と今申上ぐるには忍びませぬ。只だ父君を何卒御大切に遊ばしませ。仰せられ

た通りの孝心深き御心に、御老體を御任せ申します。とはいひながら、
此のやうな、御不興を蒙らずば、どのやうなよい處があらうとも、父
君を棄てゝ參らうとは思ひませぬに。――さらば御機嫌よう、御兩方
樣。

レカ　要らざる指圖立には及ばぬわいの。

ゴチ　ふとした拍子で、其許を取つたフランス王、倦かれぬやうにしたが
よい。ぼんに其許は柔順からぬ性質、報いは覿面、爭はれぬものじやな
あ。

コル　深いたくみの底に何が潛むか、時經つ中には顯はれませう。過失を
包む者は恥辱に笑はれる時が來ると申します。左樣ならば御息災で。

フラン　さらば參らうコルデリア。

ゴチ　コレ妹、お互の身に關はる事で、話したい事が澤山ある。父君には大
方今夜、直ぐに御出立ある事であらう。そして姉君の御許へ――姿方へは翌く
る月。

レカ　大方左樣でムりませう。

ゴチ　見やる通り、御老年の御移り氣。よう見屆けた事であらう。日頃は彼
のコルデリアを、此上なう御寵愛遊ばしたに、譯もない事に、今日は彼
の通りの御勘當。除らといへばおろかしい。

レカ　御年のせいでムりませう。とは申すものゝ、從來とても、いつも一徹
な御性質。

ゴチ　分別盛りの、御壯年の折とても、御短慮なりし父上樣。まして御老年

とフランス、コルデリア退場

の今は昔ながらの御一徹に、かて〳〵加へて御年故の御我儘どのやうな難題を仰せらるゝか、思ひやらるゝ事ではある。

レカ　今日のケント御追放にも、劣らぬ御氣まぐれな御沙汰などは、度々出る事でムりませう。

ゴネ　またフランス王と、御訣別の御挨拶もあることなれば、どうぞ打合せをして置きたい。彼のやうな御氣性の父上に、いつまでも權力を御有たせ申して置くならば、御領土分配故、却てよい迷惑を致すは吾々。

レカ　熟と御相談申しませう。

ゴネ　此餘熱の冷めぬ中、何うか致して置かずばなるまい。

と二人退場

第二場　グロスター伯爵が居城内の一室

エトマンド（グロスターの庶子）書翰を携へて登場

エド　拙者が守護神は、「自然」の女神。自然の則に從ふこそ拙者の義務。何ぞや浮世の習慣に從つて、一年餘り、遲れて生れた爲めばかりに、おめおめ兄貴に家督を遣らうや。何ぢや庶子ぢや、庶子が何卑しい。此躰軀ぢやとて其通り、何處に何相違のあらう。けしからぬ世間の習慣。庶子ぢや、妾腹ぢや、卑しいさもしいといふ焼印を、我等が額に捺しつくる。嗚呼、にくいて、氣乘のせぬ本妻腹より、脂の乘つた妾腹から、却て善い子が生れるものぢや。ヤイ御曹司エッヂャア殿（異腹の兄）。卿が領地は此エドマンドが申受くる。父上の御寵愛に於ては、妾腹の某も本腹の卿も變り

はない。イヤ此の本腹といふ詞の耳障り好さ。とはいふものゝ、本腹殿、此書面が圖に當り、計略案の如く參るが最後、卑しいエドマンドは、本腹殿の一段上手へ座らねばならぬ。いや甘いぞ〳〵、此上は神々も、庶子黨一味に、一脊の御力を貸して下され。

グロスタア登場

グロ　ケントは彼の樣な御追放、フランス王は喧嘩別れ、そして殿下は、今夜出發。政權は御引渡し、定額の養老金て御滿足。是が即座の御取極めとは——やあエドマンド、何ぞ聞及うだ事はないか。

エド　是は〳〵父上樣、何もムりませぬ。

グロ　何故其樣に遽たゞしく、其書面を取かくすぞ。

と急がはしげに書翰を收むる

エド　イヤ何、聞及うだ御話はムりませぬ。

エド　讀んで居つたは何書付ぢや。

エド　イヤ、何てもムりませぬ。

グロ　何でもない、然らば何故其樣に、遽たゞしく懷中へは推込みしぞ。何でもない事ならば、隱すには當らぬ事どれ見せい、ハテ何てもない事であれば、眼鏡にも及ぶまい。

エド　何卒御免なされて下さりませ。是は兄上よりの御書面で、まだ一通り拜見致しませぬが、既に披見致した所ては、父上の御覽に入れるは、少々憚りに存じまする。

グロ　其書面を出せと申すに。

エド　差上げねば御意に忤ふ、差上げても御意に忤ふ——此書中の趣は

どうやら容易ならぬ——

グロ　どれ見せい〳〵。

エド　大方兄上には、某が心中を、試して見やうとての此御手紙でムりませう、それてこそ御身の明りも立ちまする。

グロ　（書面を取て讀む）かく老人を尊崇致す習風は、吾等一生の花の時代を此世淋しく過ごさしめ候上、家督相續に及び候時は、吾等は既に老衰致し、財産も樂むに由なく候はむ、吾等は既に老人政治の壓抑に、身を縛らるゝやうの痛苦を覺え候。如何に老人なりとて、かゝる虐政を行ふ權能はなかるべく候を、畢竟默從して制する者なき故の事と存候。此義に就きては尚ほ申したき事有之、御來遊を待ち候。父上永眠の上は、遺產の半ばは永久に御許が有たるべく、御許は永久に

此兄が愛弟たるべく候はむ以上。　エッチャー

フム容易ならぬ陰謀ぢや——永眠の上は遺產を半分——ええあのエッヂャーが彼奴何の手て此樣なことをたくらみ居つた、どの胸どこの腹て此樣なことをたくらみ居つた。して此書面は何時落手致した。誰が持參致した。

エド　誰も持參致したのてはムりませぬ、これには妙計が盡してムります。某が居室の窓から投げ込んてムりました。

グロ　其手蹟は兄貴てあらうな。

エド　サア、これが善い事なら、兄上の手蹟てムると、誓を立ててても申上げる處でムりますが、事柄が事柄故、某は左樣てはないと信じたうムります。

ケロ　いや彼奴の手蹟ぢや。

エド　如何にも兄上の手蹟てムりまする。作去書中の趣は、御心にもない事てムりませう。

ケロ　此事に就きて是迄に、其方の氣を引いて見しことはなかりしか。

エド　其樣な事はムりませなんだ。たゞ兄上の御詞に、子は既に成人し、父は老衰致せる時は、父は子に萬事を任せ、子は父の財産を處理致すが當然ぢやと、口癖に仰せられたを承りました。

ケロ　おゝ不屆奴、不屆奴。書中の趣が正しくそれ。忌はしき奴、人情を缺いた、惡むべき畜生同然の奴。いや畜生にも劣つた奴。早々探し出して縛つて來い。憎みても餘りある奴ぢや、何處に居る。

エド　某はよう存じませぬが、父上御自身にて、兄上を御糺明遊ばされ、如

何なる御心といふ、確かな證據の擧がる迄は、先づ〳〵御愼りを御控へなされませ。さすれば正當の筋道を御蹈みなさると申すもの。作去兄上の御志を御糺しも遊ばさず、御無躰な御處分などをなされうなら、それこそ父上の御名譽に、大きな傷をつけ、兄君御孝行の精神をも、散々に損ねることてムりませう。某は一命を賭けても、兄君がかやうな御書面を御遣しなされたは、弟が父上への孝心を試めす爲めて、深いたくみのないことは、屹度御請合ひ申しませう。

ケロ　其方の考は確と左樣か。

エド　御異存もなくば父上には、某が兄君と、此儀に就き御面談致すを、つと御立聞遊ばしませ。さて何れとも御耳に殘る證據を取て、それて樣子を御つき留め遊ばしませ。明日とも云はず今夜直ちに、そのやう

に取斗らひませう。

グロ　いかに彼奴ぢやとて、其樣な惡魔とも思はれぬが。

エド　そして確かに、左樣ではムりませぬ。

グロ　此樣に心から底から、愛して居る父に向つて、えゝ不屆な、エドマンド、早う彼奴を探し出して、そろ〳〵持懸けて談話を釣り出せ。兎も角も其方の知慧で、よいやうに斗らへよ。縱令何を差出しても、此疑は解かにやあ置かぬ。

エド　早速御目に懸り、樣子次第で如何やうとも斗らひませう。そして御報告せ申しませう。

グロ　此程の日食月食、何ても吉事の兆てはない。此はかう彼はあゝと、天文學は理屈をいふが、此樣な事があると、乾度地上に變事がある。戀は

冷め、友垣は崩れ、兄弟は鬩ぎ合ふ、市では一揆、田舍で騷動、御所の中では謀叛人、父子の惡も切れ果てるやうな事がある。拙者が家の惡黨めも、前兆に從れて現れたのぢや、これは父へ子の謀叛、又國王殿下には、愛しい姬を憎い御處分、これは我子へ父の變心、是迄はよい事のみが續いた我等。これからは、謀叛ぢや、叛逆ぢや、不義ぢや、非道ぢや、ずつたんだの悶着に、追はれて墓場へ逃げ込む事か——エドマンド、乾度兄貴を尋ね出せよ。其方の惡いやうには致さぬ、氣をつけて斗らへよ。

——思へば忠義一圖なケント殿が御追放、罪は何ぢや直言故げに不思議な事てはある。

エド　ハヽア、世の中にこれ程愚かしい事はない、不運な目に遇ふ時は、自

とグロ退場

ら招いた事は思ひもせず、日月星辰へ禍の罪を塗りつけて、據なく悪
人になり、天命で阿呆になり、盗賊も謀叛人も、皆な日月の指圖のまゝ、
酒を飲むも、虚言を吐くも、姦通を致すも、皆〻な運星の廻り加減、何ても
悪事といふ悪事を致すは、悪く神意に依るやうに心得居る。いや色好
みの男が、好色心は星の故とは好い逃辭。定めて拙者が父母は、北斗七
星の下でちゝくりあつて、大熊星の下で拙者が生れ、それ故拙者は此
様に凶猛多情といふのであらう。いや阿呆らしい。たとひ拙者が生れ
る時、一番貞淑な星共が、天から覗いて居たればとて、此性質に變りが
あらうや。彼のエッヂャーは——

エッヂャー登場

いや古風な茶番の大破綻のやうに、丁度五分もすかぬ所へ遣つて來

た、（古風の婿劇に於ては事件の發展漸う其極に迫し、疏來今やと待つ所へ、丁度大破綻の面影現るゝやうに仕組まるゝとぞ）拙者の
役は悲しさうな面わくをして、物狂ひの乞食といふ見得で溜息吐息
をして居るのぢや。——おゝ日食月食は騒動の兆であつたか。

エッヂ　これエトマンド殿、何を眞面目に考へて居るのぢや。

エド　いや兄上、此間或書物で讀みました、前兆の事を考へて居りまする
が、一躰日食月食は、ありや何の前兆でムりませうな。

エッヂ　其樣な事で心を碎いて居るか。

エド　其書物の文句から老へれば、何ても凶事が續きまする、親子の不和、
書馴染の喧嘩いさかひ、凶年飢饉、國内の分離、天子や公卿を恐嚇したり呪咀ふたり、理由もないに疑ぐり合ひ、友達を追退け合ひ、一揉騒動
離緣騒ぎ、其外何やかやの大混雜。

エッヂ　ハテ其方は、何時から易者へ弟子入致した。

エド　いやそれはさうと兄上には、何時父上にお遇ひなされました。

エッヂ　昨夜御目に懸つたまゝ。

エド　御對談をなされましたか。

エッヂ　丁度二時程。

エッヂ　御心よく御別れなされましたか。御詞の御様子に、御立腹の御様子を御認めはなされませぬか。

エド　いや少しも。

エッヂ　何ぞ御不興の種を、御蒔きなされた記憶はムりませぬか。そして何卒某の御願故、御不興の冷める迄、暫らく御前へ御出でなされますな。それは〳〵きつい御立腹、兄上の御躰軀に若しもの事があつてはな

りませぬ。

エッヂ　誰ぞ讒言でも致したと見える。

エド　某も左様てはないかと思ひまする。何卒御不興がさめる迄、御謹慎なされませ。そして某が部屋に暫らく御在でなされませ。さすれば折を見て、御案内申し、父上の御詞を御聞かせ申しませう。さあ御出でなされ、これは部屋の鍵てムります。若し外出をなさる時は、一刀を帶して御出でなされ。

エッヂ　一刀を帶して。

エド　兄上、悪いやうには申しませぬ。帶刀て御出懸けなされませ。父上には何の様なことを遊ばさうも知れませぬ、某は虚言を申しませぬ、現在見聞致した事を、申上ぐるのてムります。乍去ゝ、其恐ろしさ、詞に

出すは實際の萬分一てムります。何卒早く彼方へ。

エッテ　然らば、直ぐに委しい仔細を聞かせて呉りやるか。

エド　某が宜い樣に計らひまする。

と エッテヤー 退場

爺はうつそり兄者は優長、極々善人にましますが故、人を疑ふなどは致されぬ、其の馬鹿正直が、即ち計略の乘りの善い處。先づ前途も見えて來た。生れが卑しくて取れぬなら、知慧で田地は取て見せる。此某が狙ひをつけてたくらむ事に、何仕損じがあるものか。

と 退場

第三場　アルパニイ公が殿中の一室

ゴチリル、及びゴテリルが執事オスソルド登場

ゴテ　父上には其許が、御召使の道化坊主を叱つたとやらて、御打擲なされしとや。

オス　左樣にムりまする。

ゴテ　夜晝となく父上には、妾を御嘲り遊ばされ、それからそれへと因業な御擧動、殿中を騷がすばかり、最早勘忍ならぬわいな。御附の武官とても、段々酩狂が高じて來る、剩さへ父上の、たわいもない事に御叱責、狩獵から御歸りなされたなら、妾は御前へは出まい程に、不快ぢやと申上げや。其許とても、從來の追從は中止にして、大概にしたがよい。御咎めがあつたなら、罪は妾が着やうわいな。

オス　いや殿下(アリ)の御還御てムります、御獵笛の音が聞えまする。

ゴチ　其許達の適宜にて、御接待にも疲れた風を致すが宜い。御咎めは願ふ所、御不滿足とあらば、妹方へ御越しなさらう。何あの妹ぢやとて、心は同一、御我儘を立てゝは居ぬ。讓つて了つた王權を、いつ迄も振舞はさうとは愚かしい御了簡。ぼんに老いては小兒に還る。甘言がきゝ過ぎたら、恐嚇文句も云はねばならぬ。よう云付けた事を忘れまいぞや。

と奥にて環笛の音聞ゆる

オス　畏まりまして厶りまする。

ゴチ　そして武官共は、殊更等閑に致すがよい。その爲めどの樣な事が起らうとも、少しも氣遣な事はない。一同へも傳へて置きや。咎められ好い機會にして、云ひたい事を云ふて退けたい姿の意。早速妹方へも文通して、同樣な御待遇を、致すやうに申して置かう。食事の仕度を

致してたもれ。

と二人退場

第四場　同じく殿中の書院

クント伯、袴を下部に預して登場

クント　若し此上にも語音を變へ、言葉を紛らす事が出來たら、それ故にこそ姿を變し、此處へ入込んだ目算も、首尾克く叶ふと申すもの。今は追放の此身ながら、罪得し人の御側に居て、奴僕の用を足すならば、いとしい御主君に此身をば、忠實な奴ぞと、思はれることも出來やうか。

與にて環笛の音　リア、武官及び侍者登場

リア　サア〳〵膳部を持て、少しも猶豫は相成らぬ。早う準備を致させい

（と従者一人此言に従ひ退場）何ぢや、其方は何者ぢや（とクントていふに）

クント　男一匹でムりまする。

リア　身分は何ぢや、何ぞ予に願ひがあるか。

クン　いや御覧の通りの不調法者、御信任下されう御方には忠義を誼し、正直者は可愛がり、賢者とあらば默つて交はり、徐儀ない時には喧嘩も致し、神の御沙汰を恐れ愼み、魚は一切口に入れぬ（エリザ朝時代に魚を食ふは基督教徒としてれたりとぞ）者てムりまする。

リア　そして何者ぢや。

クン　至極の正直者て、國王殿下程の貧乏者てムりまする。

リア　天子にしては貧乏な國王、臣民として其割合に貧乏なら、其方は隨分な貧乏者ぢやなして願と申すは。

クン　御奉公が致したうムりまする。

リア　誰に奉公が致したい。

クン　即ち貴大人に。

リア　其方予を承知の上か、

クン　いや存じませぬが、貴大人の御顔の中に、何とやら御主と呼んて見たい物がムりまする故。

リア　其物とは何ぢや。

クン　即ち御威嚴。

リア　して其方何が出來る。

クン　僕奴に出來まする事は、先づ秘密は堅く守り、馬を御したり、走り使ひ、込入つた御話は、訥辯て壞して了ひ、簡單の使命なら、無作法にやつ

てのけ、其外何ても人並の者の出來る事は、出來ぬ事はムりませぬが、
第一の取柄と申すは、精勤な事でムります。

リア　年齢は幾才ぢや

ケン　左樣でムります、唄を聞いて女に惚れる程若くもなく、又どの樣な事があらうと、女に溺れる程老耄けても居りませぬ即ち四十八の春秋を、此背に背負つて居ります。

リア　然らば召使つて遣す、奉公致せ。此食事が終る迄、氣に入る樣に致し居つたら、以後は側近く置いて遣はさう。ヤア食事は如何致した。道化坊主は何處ぢや。これ汝は（一人の侍に向ひ）坊主を呼んで參れ。

と侍者一人退場

オスワルド登場

ヤア其方參つたか、我女は如何致した。

オス　アノそれは殿下

と云ひも果てずオスワ退場

リア　彼奴何と申した。誰かある其阿呆奴を呼戻せ（と此命を聞きた（る武官甲退場）坊主は何處へうせた。えゝ何奴も此奴も呼の明かぬ。

武官甲再登場

おゝ如何致した。獸奴は何處へ參つた。

武官　彼の申しまするには、姫君（ゴテリル）には、御不快とムりまする。

リア　然らば予が呼寄けし時、何故戻つては參らぬぞ。

武官　きつぱりと致した詞にて、御前へは參りたうもないとの返答でムりました。

リア　何、參りたうもない。

武官　殿下、如何なる次第か存じませぬが、某が愚考には、どうやら殿下への御待遇が、從前とは變つた樣子。公爵にも姫君にも、まつた家來共一統の取なし振にも、これ迄の親切が消え失せて、いかう等閑な所が見えまする。

リア　ハテ、けしからぬ。

武　若し此推量が違ひましたら、何卒御容赦下さりませ、只だ某は少しにても、殿下御冷遇を受けさせ給ふと思ふ時は、義默すべきにあらざる故、申し上げましてムります。

リア　いや其の詞を聞いて思ひ出てた、予も疑ふ事がある。いかう等閑なる待遇振と、此程目に留まりし事のあるを、いや〳〵予がひがみであらう。わざとの無禮にては、よもあるまいと思うたが、尙ほ一考致して見やう。それにしても彼の坊主は如何致した。此二日ばかり影も見せぬ。

武　末姫君が、佛蘭西へ御立ち遊ばされてより、彼の坊主めは、いかうしほたれて居りまする。

リア　最早それは云うて呉れるな、予もよう認めて居るぞ。——其方は彼方へ參つて、用談がある、參れと姫に申して呉りやれ。（と侍者乙退場）——又其方は坊主を此處へ連れて參れ。

（と侍者丙退場）

オスワルド再登場

おゝ參つたか其方。此方へ參れ。コリヤ、其方は予を誰ぢやと心得居る。

オス　誰あらう、某がお仕へ申す妃の御ン父と、

リア　「妃の御ン父」。えゝ無禮者。犬畜生、

オス　某は左樣なものではムりませぬ。何卒御免下さりませ、

リア　何ぢや予が面を見返すか、此不屆者めが。

とリア、オスを打擲する

オス　御打擲を受ける覺えはムりませぬ。

クン　蹴られる覺えもないと申すか、卑怯者、弱虫奴が。

とクン、オスの踵を蹴て倒す

リア　忝ないぞ奴。其方は忠勤者ぢや、可愛がつて遣らすぞ。

クン　コラ立てヤイ、出て失せう、君臣の禮を敎へて遣るわ、サア退いた退いた尙躰(もつとからだ)の尺が取りたけりや(最一度蹴倒されたくは)殘つて居れ。さもなくば

出て失せう。心なしな奴ではある。そらッ

とオスを場外に押出す

リア　さて〳〵うい奴、嬉しいぞ、それ褒美を遣はす。

とクントに金錢を與へる

道化坊主登場

道坊　愚拙も此人を家來に持ちたい（道化坊は原語にて愚人と稱す、其愚人が家來に持ちたいとは即ちクント汝もりとの意）モシ、此の冠物を進ぜませうか、（道化の帽は即ち愚人の徽章なり、此帽を人に贈るは汝は愚人なりとの謎）

リア　これ〳〵其方は如何致した、達者であつたか。

道　サア〳〵此冠物を取つた〳〵、これが卿には一番似合ふ。

クン　そりや何ういふ譯ぢや。

道　ハテ、世に楽てられた御方に附くは、賢い人とは云はれまい。いやさ卿は、何の様な風の吹廻しにも、笑顔を見せて居られるか。さもなくば卿は早速追出されう。ザア〳〵此冠物を取つて置きや。ハテ此御方は二人の娘御を勘當して、末の娘御にいや〳〵ながら御跡を譲られた氣紛れ者。其御方に奉公するからは、此冠物を着けずばなるまい——申し、頼む御方（リアに向ひて云ひ）愚痴も二人の娘と、此冠物を二個欲しうムりましたな。

リア　何故ぢや。

道　たとひ家藏はみんな譲つても、愚人の記號が二通り、手元に残つて居りましたらうに。（愚なるが行爲は二重になりしなり）乍去愚痴のを一個殿下へ進ぜまする。尚一つは姫君達から御申受けなされませ。

リア　氣を付けて物を申せ。鞭があるぞよ。

道　げに、阿諛な雌犬は、座敷の上で、ぬく〳〵と臭いものを放つてもお構ひないが、忠義な大犬は鞭たれる習ひ、逃げずばならぬ。

リア　えゝ此身に取つて苦々しい其詞。

道　殿下面白い唄を一つ御教へ申しませうか。

リア　教へて呉りやれ。

道　然らば御聞成され、頼む御方。

見せるな有りつ丈、語るな底まで、貸すな手一杯、馬に乗るなら歩ける中、聞いた話は半分に積もれ、賭事は内場に見込め、酒と女郎にや逃げるが勝。さてこそ十を二つて二十の上に、融通の利く身とはなれ。

ケン　何の、たわいもない。

道　如何な知慧者も禮物がなうては、碌な知慧は貸さぬもの、卿（こなた）とても禮物を遣されぬではないか。作去頼む御方、たわいもないに御用はムりませぬか。

リア　ない〳〵、たわいなしを幾つ集むればとてたわいがあらう、無いものが有るやうにはならぬものぢや。

道　（ケントに向ひ）卿（こなた）からよう申して下され、殿下の御領地とても其通り、無い土地から收穫（みいり）はないと。殿下には愚人（アホー）の詞を御用ゐなさらぬ。

リア　苦々（にが〳〵）しい愚人（アホー）ではある。ホー頼む御方には、苦い愚人（アホー）と甘い愚人の差別を御存じてムりますかな。

リア　いや知らぬ、敎へて呉りやれ。

道　御領地を棄てよとは誰が云うた、云うた御方はこちや知らぬ、假に殿下をそれと見て、さて愚拙（ぐせつ）と並んで見れば、苦い甘いは直ぐ見える。甘い愚人はこれ此處に、苦い愚人はそれ其處に。

リア　然らば其方、予を愚人に致す氣ぢやな。

道　生れながら御有ちなされた、其外の御名號は、御棄てなされたではムりませぬか。

ケン　いやこればかりは、全くの愚人（アホー）ではムりませぬ。

道　いかにも愚拙ばかりが愚人でない、上つ方が、愚拙ばかりに愚人（アホー）を御許しなされませぬ。愚拙が愚人を獨占に致しまするとお役人方が

是非据分をとせがみまする。御婦人方とても其通り、愚拙ばかりに愚
人を御許し遊ばされず、分前をと仰せられる。（常時嫉妬の癖可恥悪習
興ふるの習慣ありし を諷刺するなり）モシ頼うだ御方、雞卵を一つ愚拙に下し置かれう
ならば、愚拙は王冠を二つ献上致しまする。

リア　二つの王冠とは何の事ぢや。

道　ハテ雞卵を真ン中で二つに割り、中味を食へば、後に残るは二つの王冠（卵殻を意味するリアが王冠なりルバニイ、コーンオフールに分典せしを諷す）――頼む御方が正物の王
冠を真二つにして、双方共他人に御譲りなされたは、馬の脚を汚すが
惜しさに、馬を背負つて泥路を渡ると申すもの。ハテむざ〳〵金の王
冠を棄てるとは、禿げた御頭顱の其中には、餘り御智慧がないと見え
る。いやかく申す愚拙が詞を、愚人の嘘語などゝ唱す奴は、それこそ撻

ちのめしても飽足りない奴。

今年や愚人の因果番、賢い御方の間が抜けて、智慧の遣り
場も御存じない、お蔭で愚人が不繁昌、

リア　其方は何時の間に色々の唄を稽古致した。

道　是は頼うだ御方が、姫御前達を母君と御頼みなされてから、稽古致
しましてムります。ハテ貴下様が、鞭を姫達の御手に御渡しなされ、元
の孩児に御還りなされた時

喜び涙に暮れたは御二人、
悲し涙に暮れたは愚拙。
彼程の王様がたわいもない、
愚人に交つてやんちや遊び。

申し我君、何卒虚言の師匠を取て、虚言の稽古を致させて給はるやう御願にムりまする。恐拙は虚言吐く術が習ひたうてなりませぬ。

リア　虚言など申したら打擲致すぞ。

道　さて〳〵貴下樣御親子は、何うして此樣に御遊ひ遊ばすやら、姫君達は眞實を申せば御打擲なさると仰有る。然るに貴下樣は、虚言を申せば御打擲遊ばすと仰有る。そして時には默つて居るとて御打擲を受けまする。いや道化にはなりたうないもの。とは申しても我君の樣にも成りたうはムりませぬ。貴下樣は御腹の右左から、知慧といふものを取つて了つて、中央には殘るものもないあはれさ。ヤ、、其片割の一つがそこへ御出なされた。

ゴチリル登場

リア　ヤイ女。如何致した。額に寄せた其皺は何と致した。近頃は除り濕面が過ぎるやうぢや。

道　姫君の御濕面などは、御氣にも留めぬ其昔は、我君にも天晴男であらせられたが、あゝ今は何たる見すぼらしさ。我々風情にも劣る御身の上。ハテ恐拙は愚人ながらこれでも男。貴下樣は乍恐男の數の中にも六つかしい——（ゴチリルに向ひ）ハイ〳〵默りまするでムりませう。どうやら默り居らうと命せらるゝやうな御顏色。叱々。

唄「實も皮も留めぬ御身の味氣なさ——（古き諷刺歌の一節なるべし）

おゝこゝに豆を摑いた莢殿が居らせられた。（とリアを指す）

ゴチ　父上、年中無禮講の道化を始め、御從者の誰彼が、忍ぶに忍ばれぬ亂酒亂行、騷々しい喧嘩いさかひの片時止む時もムりませぬ。實そ父上

に申上げ、御取締りを願はうかとも思ひましたが、今宵の御詞御擧動から思ひ直せば、これは父上御承知の上、却て御勸め遊ばすのでがなムりませう。若し左樣ならば忌々しき御心得違、恐れながら宮中靜謐の爲めには、御處分をも致さねばなりませぬ。父上に對し斯樣な擧動を、平時ならば人の咎め世の謗りもムりませうが、致方なき今日の仕儀、道理と見ぬ者もムりますまい。

道　いかにも〳〵、我君
呼「鶯が養ひ上げた郭公、
恩に甘へて假親の
首をあんぐりちよんぎつた。

げに〳〵油が盡きれば燈心は棄てられる。お蔭で我等は眞暗々々。

リア　ヤイ其許はそれても予が女か。

ゴ子　コレ申し、知慮分別に御不足のない御身。ちと御嗜み遊ばして、今日此頃の變り果てた御行跡を、お改めなされませ。

道　車が馬を曳くも時世時節と御存じないか。

リア　えゝ我ながら我身が疑はしい、此身はよもリアではあるまいがやうに歩み、かやうに語るはリアであらうか。えゝ兩眼も當にはならぬ。知力が衰へたか、分別が鈍つたか、眠てか覺めてか覺束ない。いや〳〵迚も覺めては居まい。此身は抑も誰であらうぞ。

道　即ちリア王の影法師で。

リア　（道化の詞を聞かずに）知りたいものぢや。身に纏ふ此衣服や、心覺えをたどつて見れば、此身即ちリア王にて、二人の女を有つ筈ながら、苟くもリア

王が生の女に、此様な待遇は受けもせず。

道　影法師なればこそ、姫君達の御心のまゝ。

リア　其許の名は何と申す。

ゴ子　その御詞からが、今日此頃の狂語戯謔。何卒妾の申上げる意味をば、悪しからず思召せ。御年の上をも少しは御考へなされて、ちと御嗜みなさらずばなりますまい。百人の御附の武官は、揃へも揃つて亂暴者狼籍者、遠慮もない身の擧動。殿上は恰ら茶屋小屋同然、これがどうまあ嚴然とした、帝王の住家と見えませうぞ。宮中の汚れ辱しめ故、是は處分を致しまする。就きましては妾の御願ひ、武官の數を減し、たゞ御年ばひに相應はしい、其身の程をも又父上の御身の程をも、辨へる老人共を、殘す事に致したうムります。

リア　ちえゝ無念。物共馬に鞍を置け、武官共を呼集めよ。見下げ果てた不孝者、最早汝の世話にはならぬ、まだ外にも女がある。

ゴ子　父上には妾の家來を御打擲、御附添の狂漢原は、上役人を奴僕扱ひ。

アルバニイ登場

リア　後悔先に立たざる悲しさ、おゝアルバニーも參つたな、是は卿の圖らひか、包まず申せ——ヤイ〳〵馬を用意致せ、えゝ恩知らずの薄情女、これが我子ぢやと思へば、鬼とも夜叉とも譬へやうなく淺ましい。

アル　何卒其樣におせきなさらず。

リア　（ゴ子に向ひ）汝夜叉、よい加減の事を申すな、武官共は撰りに撰つた武道の達人、守るべき義理を確と守り、身の名譽は墜さじと、些細の事にも心を碎く小心者ぢやわ。おゝはかなき過失故、予が腹の虫に住所を變

へさせ、永年の愛みを一朝に失つて、苦い憎悪を受けたなれど、想へばあのコルデリアはいとしの者、彼女に比ぶれば汝の心の恐ろしさ。それにつけても我ながら、彼の様な愚かしい意（悪しと思ひし）を容れ、賢い分別を追出した、これ此門（腦髄を指す）が恨めしいわい。

と自ら其頭を打ちつゝ

いざ参らう、者共。

アル　何故其様に御心を騒がせらるゝか、某に於ては一向に存じませぬが、少しも御意に背いた覚えはムりませぬ。

リア　さうであらう〳〵。——ゑゝ造化の女神も心あらば、何卒此女奴に子といふものを悪ませ給ふな。此奴が胎内の子種を枯らし、彼の腐つた躰軀から、子宝といふ芽のふかぬやうに致して呉れたいざもなく

ば生れ損ひの執物者、絶えず母に苦労をかける子を生んで、それ故生若い額の上に皺を刻み、落つる涙で頬に溝を掘つた上、母たる者の恩も悪も難有いとも思はれず、さてこそ恩知らぬ子を有つた苦みは、毒蛇の牙にも優るといふを知らせたいざ〳〵さらば。

とリア半分行きかゝる

アル　さて〳〵解しかぬる此場の様子。

ゴチ　其仔細を聞かうなどゝは要らざる御詮義。たゞ老巻た御心に任せて置くが宜いわいな。

リア再び戻り来て

リア　何ぢや、一時に五十人の武官を減す。それも半月足らずの中に、アル　ても何事でムりまするな。

リア　話して聽かさう——（向ひ（ゴネリルに））え、無念な、汝故に此軀が、此樣に顫くぞや。制へて制へ切れぬ此熱涙も、たゞ汝故とは思ふも口惜しい。ちえゝ不屆女、汝が身中に殘る隈なく、此父が呪咀の毒の泌み渡れ。えゝうるさい眼ぢや泣くか〳〵泣いて見よ、抉り取つて濕れたまゝ肥料にするぞ。えゝこれ程迄とは思はなんだ〳〵。いや宜い〳〵、最一人優しい孝行な女がある、汝の親不孝を話したなら、定めて其の猥面を、引掻かずには居られまい。ヤイ〳〵汝はな、此父が一生王位を棄てたと思ふてあらうが、今に見よ又々元の姿に立還つて、汝を慴かして呉れるぞよ。

ゴネ　あれを御覽なされましたか。

とリア、ケント及び侍者退場

アル　コレ、ゴネリル、其許愛しいは愛しいが、見遁しならぬ父君への今の擧動——

ゴネ　其樣な事聞きたうない——オスワルドは何處にぢや

（道化に向ひ）おゝ其方愚人とは名ばかり大惡人、御主人の後を御慕ひ申せ。道　なう〳〵リアの君、ちと御待ちなされ、御同道申し上げませう。

叫「こんな娘とこん〳〵狐、愚拙の頭巾を細に代へ、縱つて殺して乘てたら宜かろ、それ〳〵狐ぢや追つてけ〳〵

と道退場

ゴネ　イヤ、姿は父上に、御諫言を申上げたばかりてムりますぞへ、百人の武官をば、軍扮裝で附けて置くは險呑至極。どのやうな夢に浮かされ、

どのやうな風聞に惑はされ、どのやうな不平があり、さて我々に胚氣がさすとも、直樣武力を楯にして、老の氣隨を推透さうなら、我々が生死さへも、只父上の御心任せてムりますぞへ――コリヤ、オスワルド

アル　それは案じ過ごしてあらうぞ。

ゴテ　安心に過ぎるよりは優りませう、杞憂の種は絶えず刈取り、杞憂せぬが妾の願ひ。父上の御心はよう存じて居ります此身、父上の御詞は妹方へ報告せまする。若しそれでも妹が、妾の詞を聽入れず、盲人の武官を附け置くなりや――

オスワルド登場

おゝオスワルド、妹方への書面は、最早出來致したか。

オス　出來致しましてムります。

ゴテ　そんなら早う從者を連れ、早馬で急いで往きや。そして妹に逢うたなら、妾が心配の箇條を具さに陳べ、其許が意見も加へ、よう合點をさせて給もれ。さらば早う往つて早う歸るを待つて居るぞや。

とオス退場

はて我夫、優長な爲され方を、咎めるではなけれども、恐れながらそれは溫厚とお褒め申すよりも、知慧のないと申し上げたうムりますぞへ、

アル　其許の眼に何れ程の明があるかは知らぬが、なまじひ慾をかわいて、却て無慾に似たる擧動を致すは間々ある事ぢや。

ゴテ　否それは――

アル　よい〳〵、結局を見やうぞ。

第五場　同じく門前の廣場

リア、ケント、道化登場

と二人退場

リア　其方は此書面を携へ、一足先へグロースター（コーンウォール公の住地）へ參れ。但し女には書中の趣につき、問はれる事の外、一切語り聞かすてないぞ、そして精々急がぬと、汝よりも予が先に着くであらうぞ。

ケントいや御書面を御渡し申す迄は、少しも休む事ではムりませぬ。

とケント退場

道　ちと伺ひたい事がムります。腦髓と申すものが腫にあつたら、滅多な處へ足は向けますまいが其代り凍傷にかゝる患がムりませうな。

リア　當り前ぢやわ。

道　イヤ御安心なされませぢやと申して腦髓のない貴君の一德には、御知慧に上靴を穿かせる世話も入りませぬ。

リア　ハツハツハツ

道　いや最一人の姫君は、乾度父君を御親切に御待遇なさるでムりませう。柚と橙が似たる如く、此なる君と彼なる君とは、いかう似て在せども、其處には又其處がムりまする。

リア　何の樣であらうぞ。

道　ハテ、柚は其味柚に似たるが如く、二の姫も一姫の樣な酸ばい味が致しませう。貴君樣には、一體鼻と申す物は、何故顏の眞中にあるか、其理由を御存じてムりまするか。

リア　いゝや存ぜぬ。

道　それは兩眼を鼻の兩側に安置し、鼻にて嗅き出せぬものは、眼で見付出さう爲めてムりまする。

リア　あゝ予はコルデリアに濟まぬ事を致した——

道　牡蠣は何故其殼を作るか、御存じてムりまするか。

リア　いや存ぜぬ。

道　愚痴とても存じませぬ。作去蝸牛の殼ある理由は存じて居ります る。

リア　如何なる理由ぢや。

道　ハテ首を仕舞う爲めてムります。女達に讓つて了つて、自分の角は鞘なしに、曝して置かう爲めてはムりませぬ。

リア　えゝ父たることを忘れたい。かやうな恩愛の深い父親に——ヤア馬の用意は宜いか。

道　御家來の驅馬共が、只今御馬の周りに騷いて居りまする。それはさうと七曜星は、七個に限る其理由には、善い理由がムりまする。

リア　八個はない故てあらう。

道　實に〳〵御意の通り。我君には愚人にお成遊ばさるれば、結構な愚人にお成なされまする。

リア　理が非でも再び王位を取戻したい——えゝ恩知らずの夜叉女。

道　作去若し我君が愚痴に召使はるゝ愚人なら、早う齒を取り過ぎた罰と致して、一棒を喰はせずには置きませぬものを。

リア　そは又何故ぢや

道　賢しこくもならずに、酷ばかり取るは、不法でムりまする。

リア　おゝ、心がむか〳〵致す、何卒逆づる此胸を鎮めたい、發狂は致したうない。

一紳士登場

どうぢや、馬の準備は宜いか。

紳　宜しうムりまする。

リア　然らば、ソレ參れ。

と一同退場

第二幕

第一場　グロスター伯爵居城内の庭前

エドマンド及ビ廷臣クラン登場、兩人出合頭

エド　これは〳〵クラン殿。

クラ　おゝエドマンド殿、某は只今御父君に御意を得て、コーンヲールの公爵並に公爵夫人レガン姫、今宵御館へ御來臨あらせらるゝ旨、御報知せ申して參りました。

エド　それは又如何なる次第て。

クラ　某とても存じませぬが、貴殿には世間の風聞を御聞なされたか、尤も風聞と申しても、耳に口の秘密でムる。

エド　いや少しも聞きませぬが、そは又如何様な風聞で。

クラ　貴殿には、コーンヲール並にアルバニー兩公爵の御中に、近頃戰端の開かるべきとやうの、噂を御聞き込はなされませぬか。

エド　いや少しも。

クラ　ハテ、然らば、いつか御耳に入るてムらう。いや御免あれ、おさらば。

とクラン、退場

エド　何ぢや、公爵が今宵御來臨ある、是は益す面白い。此上もない幸福。思ふ坪へ嵌つて來るといふものぢや。さて親爺殿には、兄者を捕へる爲めとて、見張の番人を置かれた樣子、こゝは一つ手柔かに繊巧かい細工をせずばなるまい。何卒運よく、そして手捷く片つけたい。申し兄上、一言申上度い事がムります。お來なされ、兄上。

エドガー登場

モシ、父上が貴兄の御出入を御覗ひなされまする。早く此處をお逃げなされ。御在家を告口致した者がムる樣子。幸ひの此闇夜。して兄上にはコーンヲールの公爵に、何か御陰口でも御きゝなされた事はムりませぬか。公爵には此夜陰に遽たゞしう、夫人御同道にて此處へ御來臨あるとの事。如何でムります、アルバニー公と鎬を削る、コーンヲールの殿に對し、何か仰せられた事がムりませぬか。ようお考へなされませ。

エド　いや一言たりとも、左樣な事は申さぬが。

エド　ヤ、父上が御出の樣子。御免あれ、某は見せ顯ばかりに、一刀を拔きまする。貴君もお拔きなされて、見事斬り合はせる躰をなされませ。（と一段聲

（を高く）ヤア、従順しく父上の前へ御出あれ、誰か有る燈火を持て、（低く又聲を）お逃げなされ兄上（又聲を張上げ）松明を持て、松明を、（と又聲を低くし）左樣ならば御機嫌よう。

とエッヂヤー退場

どり、や、少々血を出して置いて（と自ら腕を少し傷ける）天晴苦戰の躰に見せて呉れうか。酔どれた色男が、女への心中立に、腕の血を絞るといふは能くある事ぢや（當時情婦の健康を祝する爲めに互に己が血を混ずる風習ありしとぞ）——（と聲を上げ）父上父上樣、それお留めなされ、誰ぞ居らぬか。

クロスター及び家來共松明を持ち登場

クロ　ヤア、ニドマンド、不孝者は何處へ失せた。

エド　此の暗闇に抜刀を翳し、何か呪文を唱へながら、月に祈請を籠めら

れてゞムりました。

クロ　して何處へ失せた。

エド　御覽あれ、某は此通り傷を負ひました。如何致しても兄上には——

クロ　不孝者は何處へ參つた。

エド　かう彼方へ御逃げなされました。

クロ　それ追つ駈けよ、後を追へ（と家來の三人退場）——「如何致しても兄上には」——して何ぢや。

エド　父上弑虐の密謀を、某承引仕らず、却て親を弑する者は、天罰立ろに至るは必定、まつた親子を繋ぐ恩受の羈と申すは、斷つに斷たれぬ因緣深きものなる由を申せしに、結句御陰謀の妨害と見て取つたか、用意の抜刀で躍り懸り、柄も通れの不意討ちに、不覺や此腕をかすられ

ました。乍去義我に在りと思へば、忽ち座る某が膽たましひ、いざゝ相手と奮ひ起つに恐れをなしてか、さては某が叫き聲に驚いてか、取る物も取りあへず、遽たゞしげに逃げ失せましてムりまする。

グロ　何處迄も逃げるが宜い。此國内に居る限りは引捉へずには置かれぬ奴。引捉らへたら首にする。此父が主と頼む公爵には、今夜此處へ御來臨の筈なれば、御許可を受けたる上、國中へ布令を出し、彼の親殺しの不孝者めを引捕へ、訴へ出づる者には褒美を遣はし、又庇ひ立を致す者は、死罪に處する趣を披露致す。

エド　御聞き下され、御隱謀を思ひ留らせうと致しても、中々以て動かし難き御決心。然らば某訴人致すと申せしに、恐ろしや兄上の御詞、生れ損ひ素寒貧。此兄が反對側を張る上は、縱令汝が何を云はうと、汝の身

につく何の德何の値打のあらうとも思はぬ世間が、いかで汝の詞を信用へむ。よしや汝が拙者の書面を見せびらかすとも、此兄が知らぬといつたら、それを眞實と思ふ者のあるべきか。それこそ却て、汝が惡むべき陰謀と思はせるは拙者の手の中。即ち拙者を無き者にして、後を横領せむとの作略て、其樣な虚言も吐くと、世間が思はぬと思うたなら、それは餘り世間を見縊り過ごすと申すもの。

グロ　いや手硬い惡黨ぢや。彼の書面も覺えがないと吐かす氣か、えゝ拙者の子ではない。

此時奥にて喇叭の聲聞ゆる

アレ、あれは公爵が御來臨の喇叭、てもも何用あつての御來臨やら——兎も角も公爵に御願ひ申し、港々に關を据ゑ、彼の不孝者を逃がしは

せぬ。又肖像を國内に配り、彼奴が顔付を廣く人民に知らして呉れむ。さて其方は孝行者、孤者が所領は、何れ其方に相續致さする事に計らはうぞ。

コーンチール、レガン及ビ家來共登場

コーンウォール　グロスター卿、參り早々不思議の噂を聞くものぢやなあ。

レガン　其噂が事實なら、何の樣な罰を加へても、腹がいようとは思はれぬ。

コレ何とぢやグロスター卿。

グロ　おゝ夫人、某が胸は張裂くる計りでムりまする。

レガ　妾の父君リア王が殺父をして名を命けた、彼のエッヂャーが卿をば、殺害なさむ陰謀とは。

グロ　おゝ夫人、夫人お耳に入れるもお恥しうムりまする。

レガ　してエッヂャーには、此程父上に御從き申す、彼の噪がしい武官共に、立交りなどは致さぬか。

エド　夫人、如何にも彼の武官共の同類でムりました。

レガ　さればこそ、悪人に化るも不思議はない。土地財寶を横領して、金錢を湯水と使ひたさ、老いたる父を殺せよと、煽かしたも彼等の所業。先刻姉上よりの御文にても、彼等が樣子は委細判明る。それ故彼等を引具して父上の御臨御あるも、妾は殿中に居ぬやうにと、わざ〳〵の御心付。

コール　予とても殿中には居らぬ所存。——時にエドマンド、其許は父に對し、通れ孝行を盡されたとの事感心致す。

エド　イヤナニ、子たる義務を果したのみでムりまする。

グロ　此なるエドマンドが彼奴の陰謀を見露はしましてムりまする。又彼奴を引捉へむと致して、御覽の通りの傷を負ひましてムりまする。

コー　して追手の者は向けられしか。

グロ　向けましてムりまする。

コー　引つ捕へたら後日の爲め、存分に處分を致すがよい。此儀に就ては、予が名義て勝手な計らひ苦しうないぞ。又エドマンド義は、今日今夜天晴の孝心を現はしたれば、以後は予が臣下と致す。箇樣に誠ある臣下こそ、我等が尤も望む所。何を措いても先づ取るべきは其方ぢや。

エド　何事も及ばずながら、たゞ忠義を專一にお仕へ申すでムりませう。

グロ　倅に代り某より御禮を申上げまする。

コー　さて今夜、かく其許がり尋ね參りし理由と申すは——

レガ　此やうに時でもない時、夜道を縫うて參りしは、グロスター殿、よく〳〵の理由あればこそ、夫につき其許の意見が尋ねたいと申すは父君と姉上と、雙方から御文が參り、御二方の中に、縺れ上がつた御不和の御報告。其返事を差立てるに、殿中からては都合が悪く、それ故雙方の使者を待たせて置いて、わざ〳〵尋ね參りし次第。其許の心勞も推察すれど、暫く胸の苦患を忍び、差迫つた我等の大事に善い知慧を貸してたもれや。

グロ　畏まりましてムりまする。折角の御光來身に餘る光榮に存じまする。

と一同退場

第二場　グロスター伯居城城門前

ケント及びオスワルド刑々に登場

オス　モシ〳〵其處を行かるゝ御方、卿は若しや此御邸の——

ケン　いかにも。

オス　然らば、馬は何れへ繋いで宜しうムるな。

ケン　溝の中へでも繋ぐが宜い。

オス　いや不敏と思つて、何卒敎へて下され。

ケン　いや不敏とも思はぬ。

オス　ハテ、然らば卿に用はない。

ケン　用がないも太々しい。

オス　卿は何故其樣に身共に向ひ、つけ〳〵と云はるゝぞ。一向見知らぬ仁のやうぢやが。

ケン　下郎、己や汝を見知つて居るぞ。

オス　然らば身共を何と思はしやる。

ケン　惡黨、無賴漢、殘肴荒しの奉公人、卑劣、傲慢、淺薄な、小祿な、貧乏な、仕着の外を着た事のない、薄汚ない毛足袋（當時の襪は大抵紐なし毛糸の襪を穿つは貧者のみなりき、盛時の襪は膝より下に垂せず以下を覆ふのみなれば此名あり）を穿く極道者、膽の小さい、刀の恐い臆病者、生れ損なひの虚榮の、馬鹿丁寧の輕薄者、葛籠一つが財産の悉皆な無宿者、淫賣宿の亭主が相應の卑怯者、惡黨、乞食、臆病者、誘拐者を混合て出來た男、定めて母は素性怪しい夜鷹であらう。かう數へ擧げた條々に相違があるなどゝ吐かして見い、びい〳〵する迄打ちのめ

すぞ。

オス　さて〳〵、知りも知られもせぬ、赤の他人を捉まへて罵詈悪口、何と恐ろしい人ではある。

ケン　何ぢや知らぬなどゝは厚顔しい奴。君の御前で、此拙者が汝を蹴転ばし、打擲してからまだ二日とも経たぬわやい。サア抜刀け〳〵、夜とはいへ月が明るい。溝の中へ斬込んで、水の中から月見をさせう（と白刀を抜き）サア抜いた、生れ損ねの虚飾家奴、抜いた〳〵。

オス　え、寄るな〳〵、身共は卿に用はない。

ケン　ヤイ抜け悪党。コレ汝はな、殿下の御為めにならぬ書面を持つて参つたな。姫の味方を致して、父王殿下を苦めうと致し居る。サア抜け悪党、抜かずば汝の胆を一拂ひぢや。サア抜いた、此方へ来い。

オス　人殺し〳〵。

ケン　サア打て下郎、サア立て悪党、撃たぬか虚飾者。

とケン、オスを打つ

オス　出合へ人々、人殺し〳〵。

エドマンド抜剣にて登場

エド　何ぢや、何事ぢや。

と両人を引別くる。

ケン　コレ二才殿、要らざる留立て致さば卿が相手ぢや。試合の方法を教へて進ぜうか。

コーンウォール、レガン、グロスター及び家来共登場

グロ　ヤア物々しい刃物三昧何事ぢや。

コー　命が欲くば靜かに致せ、最一度擊つなら擊つて見よ、命はないぞ。サア何うぢや。

レガ　ヤ、ヤ、これは姉君と父上よりの御使者ぢや。

コー　兩人の喧嘩は何故ぢや。

オス　御前樣某は息も絕々でムりまする。

ケン　フム、天晴勇氣の程を見せた故無理もない。えゝ憖病者汝は造物主の作つた人間ではよもあるまい、仕立屋に作られた人間ぢやな。（即ち人間の衣裝を着けたる斗りの人形のやうな奴の意）

コー　さて〳〵其方は奇妙なことを申す奴ぢや、仕立屋が人間を作ると申すか。

ケン　いかにも仕立屋が作りまする。乍去此不細工、如何な新前の彫刻師

ても、此樣な不細工は致しませぬ。

コー　いや餘事は暫く、喧嘩の原因は何事ぢや。

オス　我君此老惡奴は、白い髮にめんじて、命を預けて遣しましたが——

ケン　ヤイ〳〵極道者——我君御前樣の御許可さへあらば、菜は此極道者を、石臼の中へ踏み落とし、搗て粉にして便所の壁を塗りまするが——白い髮にめんじてとは、よう云つた犬侍。

コー　ヤイ靜かに致せ無禮者。遠慮と申すことを存ぜぬか。

ケン　存じては居りまするが、腹の立つ時は格別でムりまする。

コー　何故其方は立腹致すぞ。

ケン　斯樣な仁義の道をも知らぬ輩が、一刀を手挾み居る故でムります。斯樣な巧言令色の徒が、親子の中の、切つても切れぬ貴い繩を風のや

うに噛み切りまする、又は主君の心に沸く、善からぬ意を煽ぎ立て、情の火に油を差し、冷たい胸に氷を添へなど、何でも主君の心の風向次第で、御意のまゝに口をきゝ、何の事はない犬同然。従いてゆくと申す事の外は知らぬ奴。えゝ其青ざめ顔は何の様だ。何ぢや其苦笑は、拙者を恐者との意ぢやな。

コー　コリャ、其方は發狂致したか、老耄。

ケン　何故の爭ひなるぞ、それを申せ。

コー　此某と斯様な悪黨程、性の合はぬものはムりますまい。

ケン　彼を悪黨とは何故ぢや、彼が何ぞ悪事を致したか。

コー　彼の面附が氣に入りませぬ。

ケン　左様な事を申すなら、予を始め茲に居並ぶ面々の顔付も、大方汝の

氣には入るまい。

ケン　正直を申すが某の持前。夫故申しまするが實に見渡す所、歴々方の御顔揃ひ、御立派は御立派だかこれよりも立派な御顔揃を見た事もある某。

コー　ハヽヽ、此奴は無遠慮を褒められたので、態と疎雑な口をきゝ、心にもない無禮を致すのぢやな。正直朴訥な心に追從も云はれず、眞和を云ふばかり、などゝ世間が承知致せばそれても宜いが、さもなくば無遠慮の報いは遁れられまい。斯様な輩は阿諛諂佞を事と致し、維命維従ふ佞臣原より、其無遠慮の中に、却て十倍廿倍の詐術と、憎むべき野心を藏し居ると申すもの。

ケン　然らば眞當詐りなし、日神フェーバスが額の上に。輝く微の髮かとば

かり、後光の差す公爵殿下の御許を被り――

コー　それは何の口上ぢや。

ケン　御前樣の御嫌ひ遊ばすに依て、詞を改めましたのでムりまする。某は諸らひが不得手、然るに無遠慮な詞を以て、殿下を欺かうと致したは憚に悪黨。其樣な者には某も成り度うはムりませぬ。よしや殿下の御機嫌が直つて、再び其樣な者に立還れとの御詞があらうとも、某はいやでムりまする。

コー　（オスに向ひ）然らば其方は彼に何無禮を加へしぞ。

オス　某は何無禮をも加へませぬ。遂此程の事でムりましたが、彼が主と頼む國王殿下には、何か御思違ひを遊ばされ、某を御打擲なされました。其時此者が出しやばり出て、殿下へ諂諛の意か、某を後へに膝と蹴

倒しました上、伏し居る者に向ひ、惡口雜言、さも強さうな空威張り。我から負けて居る者に勝誇つて、殿下の御賞贊を被りましたが、其勝利に味を占めてか、只今此處にて、又ぞろ某に向つて惡物三味。

ケン　いやアジャックスも三舍を避くる呢きやう（トロイ戰爭の時アジャックスは味方の牛羊を敵と誤り其多數を殺しながら向ほ其誤りを知らず大敵を敗りし由を誇りたる故事）

コー　ヤア誰かある足械を持て（ケンに向ひ）頑固爺、老碌爺、ちと行儀を躾けて遣らす。

ケン　いや物事の稽古には、ちと齟を取過ぎた某、足械御取寄せ平に御無用。其上某は、國王殿下の御使者でムる。其御使者を足械に賦けては、第一殿下への御不敬、まつた殿下の御威德を、除りに御輕しめなさると申すものでムりませうが。

コー　足械を持てッ、今より明日正午の刻迄、否應云はさず縛けて置け。

レガ　正午の刻まで、はて寧そ夜分迄、そして終夜打棄つて置くが宜いわいな、

ケン　これ姫君、よしや此某が、御父君の犬なりとも、其樣な御取扱は成りますまい。

レガ　いや犬にも劣る惡黨ぢやに依て、其樣に致すのぢや。

コー　これも姉君より御申越の、狼籍者に相違あるまい、早よう足械を持ていッ。

と從者共足械を運び來る

グロ　申し、某の御願てムります。これ〳〵ばかりは御思召留まるやう願ひ上げまする。實に此者の無禮は尤むべきてムりますれど、それは國王殿

下に於て、御詰責あらせられませう。足械の義は、下司下郎の竊盜、又は其外一通りの惡戲を懲す爲めの道具てムりますれば、國王に於かせられても、大事の御使者が、左樣に賤しい責道具に縛けられて、其儘引留め置かれるを御覽なされたなら、よも御機嫌を損ぜぬ事はムりますまい。

コー　國王への辨解は予が致す。

レガ　姉君の御召使の御家來が、眼の前で蹈まれたり蹴られたりを見た時の、姉君の御心は、それどころではあるまいが——サア〳〵早う縛けやいのう。

さらば我君參りませう

とケント足械に縛けらるゝ

グロ　いや氣の毒な事ぢやな。公爵の御意て致方もない。一旦かうと云ひ出したら、留めても留まらぬ御氣性は人も知る通り。乍去身共より尚ほ熟と御願ひ申して見やう。

ケン　いや何卒願つて下さるな。某は終夜寢ずに歩つて參つて疲勞致した。暫時此儘休息致し、後は鼻唄て過ごしませう。いや兎角善人は運命の悪いもの、おさらば。

グロ　アヽこれは公爵が御無理ぢやあヽ國王の思召が思ひやられる。

とグロ退場

ケン　さても國王殿下には「天國を出て日南隈」と申す諺通り、却て悪い處へ御出なされた。（此諺は其起原不詳なれども※に述るが如き意味す）それにつけても此書面

を讀んで見たい。下界の燈火と頼む日輪が早う上ればよい。此様な災難の時には、不思議の神助もある習ひ、何でも此書はコルデリア姫が、拙者が此様に身を窶して、さすらふる趣を、神業て聞き出され、さて遣されたものてあらう。おヽ疲れ果てた我が兩眼、早う閉ぢよ、此有様を見たうもない。運命の女神もおさらば、乍去最一度笑顔を此方へ向け、車を早う廻して戻りやれ。

とケン眠り入る

第三場　森林中

エッヂヤー登場

エッ　えヽ淺ましや此身を罪人呼ばり。幸ひ大木の虚に潜んて追手は

並れたが、何處の港へも手が廻り、何處の浦にも見張を置いて、鵜の目
鷹の目此の身を捕へやうとは情ない、作法逃れるだけは逃れう所存。
又人目を眩ます爲め、貧苦にやつれた乞食共が、人間を棄てゝ獸に近
い、哀れみぢめな風躰に身を窶し、芥を顔に塗り、縨縷を腰に纏ひ、髮の
毛をくゞらかし、裸躰を露出して、雨風に曝さう覺悟。さては彼の、ベッ
レヘムの風顚院から出るといふ、痲痺れた腕に針や串、釘や刺を刺透
して、たけり狂ふ、狂人の例もあれば、此身も左樣な淺ましい業躰を裝
うて、あやしき賤が伏屋、貧しき村里、羊小屋、磨臼小屋と彷徨ひて、或時
は狂人のすなる呪ひの聲、或時は神に捧ぐる祈禱を誦し、一椀の惠を
乞ひつゝ行かむ。あゝ今よりは哀れの狂人、哀れの非人。狂人非人とし
てこそ生存ふれ、今迄のエッヂャーは早やこれ迄。

第四場　グロースター伯居城の前

ケント足械に繋げられしまゝ嘯され居る處へ、リア、道化及紳士一人と退場

登場

リア　兩人（コーンウォール及其妃レガン）ながら、左樣に俄かに他出致すとは不思議千萬。そして此方より差出した使者（ケント）を還さぬとは。

紳　某の承りました所では、遂昨夜迄も、御兩人ながら、御他出の御思召は、無かりしとの事てムりまする。

ケン　申し、我君々々。

リア　ヤア其方てあつたか。斯樣な恥辱を見せられながら、さもたのしさ

うな其様子。

ケン　たのしい事がムりませうや。

道　ハヽア、これは酷い物を穿かせられた。馬は口で繋がれ犬と熊は頸、猿は腰、そして人間は脚で繋がれるか。それとも人間は脚が我儘になり過ぎると、かう木の襪を穿くものか。

リア　予が使者たる其方の身分にも遠慮せず、此様な處分を致したは何者ぢや。

ケン　誰あらう、姫君御夫婦でムりまする。

リア　いや左様ではあるまい。

ケン　いや左様でムりまする。

リア　左様ではなからうと申すに。

ケン　左様でムると申しまするに。

リア　否や〳〵、彼等が斯様な事は致すまい。

ケン　いや爲されました。

リア　誓つて左様な事は。

ケン　誓つて、左様でムりまする。

リア　彼等が左様な事を致さうや。彼等には致されもせず、致さうとも致すまい。酔興でもなく此様な狼籍をひろぐなら。それは殺人罪にも優る大罪。さゝ成るべく手短かに、予の使者たる其方が、いかなれば斯様な憂目を見るか、見せらるゝか。其仔細を語つて聞かせよ。

ケン　かやうでムります御聞き下されい。某は我君の御書面を、殿中にて差上ました時、折つたる膝を伸すや否、ゴネリル姫よりの御使者一人、大

汗になつて息も絶々、姫よりの御傳言を述べ立てながら、某へ遠慮も致さず、持參の御書面を差上げました。然るに御兩所樣には、それを其場で御披見あり、俄かに御家來を召寄せ、大急ぎで御馬に召し、某には從いて參れ、御返書を渡すに付き、待居れと冷淡な御詞のまゝ、此處へ御拘留なさました。さて某は御詞に從ひ、丁度此處迄參りし時、彼の姫君の御使者に出遇ひましたが、其御使者故にこそ、某へ冷かな御待遇も過剩さへ其男は、遂昨日殿下へ御無禮を申上げた不屆奴。それかれ分別よりも血の氣の多い此某、遂一刀を引拔きました。然るに彼奴卑怯にも、高聲を立てゝ助け呼はり、遂コーンウォールの御婿君並に姫君の御目に留まり、御兩所の御拵さにて、御覽の通りの御處刑を受けましてムります。

道　さて〳〵雁の飛び方が其樣では、まだ〳〵春にはなりさうもない。
（第二の姫さへ其樣な狀態にては、リアは未だ滿足すべき境遇には逸し難しとの意は未）

綴縷を着た父親は、
子さへ見還る眼を有たず、
財布の重い父親は、
皆な孝行な子ばつかり。
さて〳〵薄情な運の神、
貧乏人へは顏も向けず。

リア　おゝ胸にさし來るは癪病が、そゝ悲しがせき上げる、下れ〳〵。して

ケン　娘は何處にぢや。

伯爵の居城、即ち此邸中に。

リア　其方共は從て參るてないぞ、此處に待ち居れ。

（リア退場）

紳　（ケンに向ひ）其許には、眞實今云はれた通り、其上には何不調法もないのぢやな。

ケン　ないとも〳〵。したが國王殿下には、何故碌々御供も召連れず御出なされた。

道　判り切つた事を問はるゝ、それてこそ桎梏に懸けられても申分はあるまい。

ケン　とは又何故ぢや。

道　冬になれば食餌のないものぢやといふ事は、蟻に聞いても知れる事ぢや。鼻て嗅きつけて、金の香のする處へ、寄つてたかる蠧はな、落魄

たと見た時には、盲人てなけりや從て居ぬ。よしや盲人ても、落魄れた臭氣の嗅ぎ分けられぬ者は、二十人に一人もあるまい。大きな車が山から轉げ始まつたら、早く手を放さぬと、一緒に落ちて頸を折られる。それとは反對に、大頭が山を上り始めたなら、確かり握まつて一緒に引摺上げて貰ふが德用作去是は愚人の勸言。利根な人からもつと善い勸言を受けたなら、これは愚捕へ還して下され。どうて愚人の勸言故眞當な人間に、守つて貰はうとは思はぬわさ。

金が欲しさの御奉公、
外觀ばかりの忠臣は、
雨が降るとて逃仕度、
嵐になつたら隨德寺。

それでも愚人で此方や殘る。
勝手に逃げよえせ賢者、
逃げる惡徒がまことは愚人、
殘る愚人が却て善人。

ケント　其歌は何處で習つた。

道化　足枷の上で……おつと違つた。

（リア、グロスターを作ひ再登場）

リア　何ぢや對面を拒むと申すか。病氣ぢや疲勞致した。徹夜の旅行を致したと。みな虚構ぢや、畢竟此父を邪魔者に致すのぢや。もつと善い辯解を聞いて參れ。

グロ　殿下、公爵の一徹な御氣質は、兼て御承知の通りでムります。一旦

からと仰せられた事は、少しも御曲げはなさりませぬ。

リア　ちえゝ人畜生、餓鬼、地獄。一徹とは何たる氣質ぢや。コレ、グロスター、グロスター予はコーンヲール公爵並に其妻と面談が致したい。

グロ　いかにも其通りに、某より申上げましてムりまする。

リア　申上げた、それは予が詞を確と了解致した上てか。

グロ　御意の通りにムりまする。

リア　即ちコーンヲールには、國王が面談致したい。又女レガンには、慈父が面談致したい、膝下に伺候致せと命じたのぢや。其許は此通りに申聞けたか。忌はしや一徹ぢや、一徹の公爵ぢや、其一徹な公爵奴に申せ——いや先づ此度は控えやう。眞實所勞てあるやも知れぬ。病氣故には如何なる難儀をも忘る習ひ。五躰に常ならぬ所あれば、精神亦之に

伴うて、日常の自己と異なるは、人間の常ぢやに由て、予も承知致すと致さう。想へば予も一層一徹な氣質故、精神常ならぬ病人を、健やかな者と思ひ違ひ、計らず心得違ひを致した。とは申せぇゝ口惜しやあれを見よ、（とケンの方を見ながら）如何なれば彼なる者を、彼の様に致せしぞ。此一事から推量致せば、兩人が此處への轉住は的切り計畧。サゝ、彼なる家來を還せ〳〵。其許は夫妻の者に、予が面會致したいと、改めて申して參れ。そして兩人共此處へ參り、予が申す事を聽聞致せと申聞けよ。それても聽かずば、寢所の外で大鼓を打ち、眠氣を覺して呉れると申ずが宜い。

ケロ　何卒して某は、御雙方の御仲を、よしなに繕いたい所存でムります る。

リア　あゝ我が胸の中、せき來る情緒の切なさは。おゝ此の暴れ狂ふ情緒を鎭めたい。

道　然らば殿下、生きたまゝ、鍋の中へ入れた鰻が暴廻るので、棒の端で鰻頭を叩きながら、此畜生〳〵〳〵と、叫つたと申す厨婢のやうに、御情緒に向つて「此畜生」を仰せられては如何でムりますな。心から馬が可愛いので、藥に牛酪をつけて喰はせたと申す男は、大方右の女の兄者でムりましたらう。（馬は實を嫌ふ、故に牛酪をつけて馬に與ふるは却て馬を愛せざるの所爲に當る）

グロスター、コーンウォール、レガン及び從者大勢を作ひ登場

リア　ヤア兩人共健勝で。

コー　ようこそ御臨御下されました。

レガ　父上様、お嬉しうムります。

リア　おゝさうてあらうレガン、さうあるべき筈ぢや。若しこれが嬉しうないなら、其許は此父の子ではない。死んだ其許が母はいかい不義者、精霊ながら離縁らねばならぬ。――（向ひ）おゝ其方も許されたな其義については何れ後刻。コレ、いとしのレガン、聞きやれ、汝が姉は不埒者、鷲にも劣らぬ不孝といふ鋭い嘴で、コレ此處を（と胸を指しながら）刺したぞや。はて何というて話してよいやら、彼の親不孝の程合は、詫度其許もよもやと思ふてあらう。おゝコレ、レガン。

レガ　其様に御立腹遊ばしますな、それには大方、父上様の御勘違ひもムりませう。姉上の御心得違ひばかりでもムりますまい。

此間にケントは足搦より放たるゝ

リア　ハテそれはどういふ譯ぢや。

レガ　姉上がいさゝかなりとも、親不孝を遊ばさうとは思はれませぬ。それは大方御屡従の武官の放縦を、御制へなされただけでムりませう。若し左様ならば、御尤な御計らひ、彼是申上げる缺點はムりますまい。

リア　いや〳〵憎きは彼奴が擧動。最早御年の上、人の世の旅路の果を辿る御身。其御身に關はる事は、御自分の御目よりも、もッと目端のきく、若い眼に御任せなされて、差圖を御受けなされたが宜しうムりまする。それ故斐の御願ひ、これから姉上の御許へ御引還し遊ばして、何卒御詫を仰有りませ。

リア　何ぢや詫を致せ、然らば其許は此父に、コレ見よ此様に致せと申す

か。いとしの女此身は老耄致した。兎角老人は厄介者ぢやに由て、かう膝を折つて（と脈づきながら）御願ひ申す、どうぞ衣服と寝床と、食物を與へて下され。」

レガ　およしなされ父上、見ともない御惡戯。姉上の御許へ御還りなされませ。

リア　（起上りながら）いや還らぬぞレガン、予が從者の半數を減じ、予に向て澁面作り、毒蛇のやうな舌を以て、予が胸を刺した彼奴、あの恩知らぬ素頭の上に、降りかゝる天火はないか。あの胎内の子種をば、不具に仕立てる毒氣はないか。

コー　淺ましい其御詞。

リア　あの惱躰な眼をば電の火て潰してくれたい。濕地から立つ蒸發氣の毒て、あの美しい顏を醜くして、高慢ちきが挫いて見れたい。

レガ　おゝ恐ろしや。御氣に召さぬ事さへあれば、此妾にも其呪文を、仰せられる事てムりませう、

リア　いゝやレガン、其許には此樣な事申しはせぬ。優しい其許の性質、よも姉の樣な不孝は致すまい、彼奴の眼付の恐ろしさに比ぶれば、穩やかな其許が眼は、見るも心の清々しい。父を勞はる手段を惜み、又は從者の數を減し、返し言を申したり、飮食を約めたり、擧句の果に、門前拂を致すなどは、其許にはそう致されまい。其許は自然の人情、親子の愛、式作法、報恩など申す事を、よつく承知致して居る、其許が領國の半分は、此父が與へし事を、よも忘れは致すまい。

レガ　父上、其樣な事は、仰有らずともてムりませう。

リア　フム、然らば予が使者を、足械に懸けたは何者ぢや。

と此時奥にて喇叭の音聞ゆる

コー　あの喇叭は。

レガ　あれは慥かに、姉上が御來臨の喇叭。先刻の御文にも、間もなく御來臨の由御申越でムりました。

オスワルド登場

姉君には御來臨なされたか。

リア　ヤア此奴こそ彼の無禮者。主と頼む婦人奴の機嫌氣褄に氣を揉みながら、虎の威を借る狐男、えゝ目通りを下れ〳〵。

コー　何を仰せられまする、殿下。

リア　コレ、予が家來を足械に懸けたは何者ぢや。こりや、レガン、さすが其

許は此事に預り知りは致すまいな——イヤ誰か參つた樣子。

ゴネリル登場

ヤア彼奴ぢや——（向ひレガンに）コレ其許は老人を愛しう思ひ、又自ら國を治むるにつけても、從順と申すは嬉しいものと知り、又汝とても、次第に老の阪に近寄る事を思うたなら、此父に味方を致し、此父を扶けて呉りやれ。——（向ひゴネに）ヤア汝は何の面下げて此髮を見に參つた。——おゝレガン、其許はよもや其奴の手を握らうとは致すまい。此妾が何の樣な御無禮を致しました。御老人の癖み心に、無禮々々と仰せらるゝは、餘り當にはならぬもの。

リア　えゝ此胸の裂けぬが不思議、まだこれても裂けぬか〳〵。えゝ何故

予が家來を足械に懸けおつた。

コー　それは此某が所業てムりまする。乍去彼が亂暴狼籍、これてもまだ分に過ぎる程の待遇てムりまする。

リア　何と、足械に懸けたは其許ぢやと。

レガ　コレ申し父上、老人は老人らしうなさるもの。こゝは一先づ姉上の御許へ御還りなされ、御約束の一月の終まて、御逗留遊ばされ、御供を半分御減しなされ、さて其れから妾方へ、改めて御臨御遊ばしまし。何を申すも此處は出先。御馳走に要用な、品物とてもムりませぬ。

リア　何ぢや姉の許へ還れ。供人を半分減せ。否其樣な事を致すよりは、いかなる屋根の下へも入らず、風雨暴寒に曝されて、寢や臥を朋輩に、野伏となるがまだしもぢや。姉の許へ還れ。えゝそれこそ彼の乙娘を、身

躰ばかり引取つた、執拗者の佛蘭王の前へ膝をつき、何卒御扶持を下されて、此身の短い餘命を續けさせ下されと、賴めといふにも同じ事。何ぢや姉の許へ。寧そ此下司奴（トなほして）が馬の口取にでもなれと勸めるがよい。

ゴネ　それはどうても御好み次第。

リア　コレ女（ゴネに向ひ）何卒予を狂人に致して呉れるな。最早汝の世話にはならぬ。サア是が永の暇、最早二度とは逢ふまいぞ、行きやれッ。とはいふものゝ、それても予が一身を分けた血肉ぢやな、女ぢやないや予が肉中に潜む病毒ぢや、敗血の中の腫物ぢや、瘡ぢや癤ぢや。此上は汝を叱りは致さぬ。如何なる辱めも來らば來れ、たゞ我からは招かぬ所存。如何なる霹靂の矢も、汝が頭上に落ちよとは願ふまい。又は在天の

ジョブ神に、汝が罪狀を白しも致さぬ機會があつたら改むるがよい、暇があつたら善人になる工夫を致せ。此父は胸に納めて堪えて居やうぞ。そしてレガンの許に逗留致す、百人の武士共は其儘て。

レガ　そりやなりませぬ父上。まだ御臨御のあらうとは、思ひもかけぬ事てムりますに、然るべき御歡迎の用意もムりませぬ、どうぞ姉上の仰せを御聞なされ。其御一徹な御心を、お揉め申さうと致すには、御年の上をも、樹酌致さねばならぬ筈、それ故——いや〳〵妾の申す迄もなく、姉上には何事も御承知てなさる事。

リア　してそれは本氣て申すか。

レガ　本氣の段ではムりませぬ。五十人の御供人、それて澤山ではムりませぬか、其上に何御用、大勢抱いて置きますれば、費用も多い上、危險い事てムります、思ひも寄らぬ事てムりませう。

ゴネ　又何故父上には、レガン殿の召使はるゝ家來共、又は此妾の家來共を侍從として、それて御滿足なされぬのてムります。

レガ　ほんに何故てムります父上。其樣に致して置いて、若し家來共に等閑な擧動があつたなら、其時妾共にて、其處分を致しませう。此妾に於ては、只今申した危險い事が、どうやら眼の前に有りさうに思ひますれば、若し父上妾方に御臨御の砌は、五十人を其又半分に、減して戴かう所存てムりますそれよりも多くては、どうも御受は致されませぬ。

リア　ヤイ〳〵此父は、あらゆる所領を汝等に讓り——

事てムります。と申すは同一殿中に、二人の主がありながら、雙方の家來が餘り大勢ムりましては、どうして無事に過せませう。覺束ない事てムります、思ひも寄らぬ事てムりませう。

ゴネ　又何故父上には、レガン殿の召使はるゝ家來共、又は此妾の家來共を侍從として、それて御滿足なされぬのてムります。

レガ　ほんに何故てムります父上。其樣に致して置いて、若し家來共に等閑な擧動があつたなら、其時妾共にて、其處分を致しませう。此妾に於ては、只今申した危險い事が、どうやら眼の前に有りさうに思ひますれば、若し父上妾方に御臨御の砌は、五十人を其又半分に、減して戴かう所存てムりますそれよりも多くては、どうも御受は致されませぬ。

リア　ヤイ〳〵此父は、あらゆる所領を汝等に讓り——

レガ　ほんに善い時に御譲りなされました。

リア　汝等を以て予が後見とも致して、一切の政治を托け、此身自身は、百人の武士を召抱ゆべき約束なりしに、何ぞや、二十五人に減さねば、汝の館へは入れぬと申すか。レガン確と左樣か。

レガ　幾度申しても其通りでムります。それ以上では此妾は。

リア　え、如何な悪黨でも、夫よりも上手が出れば、少しは見直されるものぢやなア。一枚上がある中は幾何か頼もしい處がある、（向ひに）よし〳〵予は其許の許へ參る。其許が五十人は、妹奴が二十五人の丁度二倍であらう。

ゴ子　申し父上、乍去二十五人は愚か、十人が五人でも、御從れ遊ばすには及びますまい。何れへ御來臨遊ばさうと、五十人百人の侍士は、御側に

侍けて置かぬ事はムりませぬ。

レガ　ほんに左樣てムりますとも。

リア　及ぶ及ばぬの理屈聞きたうない。いかやうな貧乏人でも、夫相應の贅澤はあるものぢや。汝等婦人の衣裳を見よ、寒さを凌ぐばかりが能ならば、暖かものぢや。汝等婦人の衣裳を見よ、寒さを凌ぐばかりが能ならば、暖かさの足しにはなりもせぬ、華美な粧ひ要らぬ事。あゝさりながら此身にも、眞實必要な物があるわい——おゝ諸天諸神冀くは、忍耐の力を得させ給へ、忍耐の力に入用がムる。積もる齢と哀みに老朽ちた此有樣、おゝ哀れとも見そなはせ諸天諸神。とは申せ女等の心を惑はして、不孝の子となしたるも、即ち天意神意ならば、願はくば此父をも、只管子に甘き、たわいなしには致して下されな。胸に憤怒の火を點し、婦人

の武器の涙を以て、此雨頬を汚すやうな、不覚を致させて下さるな―
―否々汝不孝者共、よつく聞け。(両人に向ひ)此返報には世間の者共―
―如何やうな手段とは未だ思ひ決めねど、世間も戦ひ慣くやうな、辛き酷き目を見せて晃れうず。コレ此父を泣くと思ふか、此父は泣きは致さぬ。泣いても足りぬ悲みはあれど、此胸が木葉微塵、幾百千の細片となつて裂けるまでは、泣かぬ〳〵。――おゝ坊主予は狂氣致すばかりぢや。

とリア、グロスター、ケント及び道化退場

コー　然らば我等も歸館と致さう、一暴風雨ありさうな空合ぢや。

と暴風雨の遠音聞ゆる

レガ　此の館は手狭ぢや程に、どうて父上と御供の者の、御待遇は碌々致されまい。

ゴネ　御自分で招いだ災、われから難儀をお求めなさるてあらうわいの。

レガ　父上御一人ならば、喜んて御宿も申しませうが、一人なりとも御供の者は。

ゴネ　妾とても其通り――アノ、グロスター殿は何處にぢや。

コー　グロスターには御老君の御供を致して参つた様子。いや其處へ還つて参つた。

グロスター再登場

グロ　國王殿下には一方ならぬ御不機嫌。

コー　して何處へ御出なされる。

グ〻　御馬を御召しなされましたが、御出の程は何處へやら某も存じませぬ。

コー　其まゝに乘てゝ置くが上分別。何事も御意の儘に爲される事。

ゴ子　決して留立せぬが宜い。

グ〻　さて〳〵眞暗にはなつて參る、風はざは〳〵と物凄い彼の響き。これから三四里四方の中には、立寄るべき處陰もあるまい。

レガ　おゝさうてもあらうが、彼の樣に我慢強い人々には、其我慢故の難行が結句修業。戸締りをよく爲されませ。向ふ見ずの從者に圍まれて、何事も彼等のいふがまゝに遊ばす父上。どのやうに煽動られどのやうな事を爲さらうも知れぬ程に、用心を召さるが宜い。

コー　實に戸締りを致され い。物凄い晩ではある、レガンのいふは尤も尤も。いざ〳〵暴風雨の來ぬ中に、參ると致さう。

と一同退場

第三幕

第一場　荒野

雷鳴電閃の暴風雨、ケント及び一紳士登場、兩人此處にて邂逅した
る體

ケン　暴風雨と共に、其處を行くは何者ぢや。

紳　いや此空合同樣、心も亂れむ斗りの者。

ケン　貴方樣てムりましたか、さて國王殿下には、何處に入らせられまするな。

紳　此暴風雨を物ともせず、風よ吹け〳〵、大地を大海へ吹き落とせ、さらずば大浪を吹遣し、此大地を一新せよとの御高言。暴れ狂ふ嵐が、還

虚容赦もあらけなく、弄り亂す彼の白い御ン髮を、我と我が手に掻きむしり、御胸の中の天地に、かき亂るゝ想ひの暴風雨を、紛らさうと遊ばされる仔引の牝熊も恐れ潜み、獅子や飢ゑたる狼も、濕れるを厭ふ此夜蔭に、冠り物も召さず走り狂ひ、どうてもなれとの御擧動。

ケン　して御供の者には。

紳　たつた一人の道化ばかり、かき亂れた御心を、輕口て紛らさうと彼が苦心。

ケン　フム、さて卒爾ながら、僕は貴方樣の御心中を承知致しまする。夫故今一大事を、御打明け申しませう。御聞き下され、まだ雙方巧みに色には顯はさねど、アルバニー、コーンウォール兩公の間には、既に御不和がムりまする然るに兩公とも、王公の位に備はる果報者の數に漏れず、

家臣の中に、密かに佛蘭西王に通ずる者あり。聞者となつて、我國情を
内偵し、兩公が御中の一舉一動、如何なる和不和の有りや無しや、老王
殿下に對し奉りては、心を協せて非道の御待遇を爲し奉りたる一伍
一什、さてはかゝる瑣々たる小事の後ろに潜み隱れる深き意を、見聞
のまゝに内報致せし樣子。さもあらばあれ佛蘭西にては、此地へ軍兵
を差し送り、我が國人の怠慢に乘じて、既に我が良港と聞えたる、さる
土地に上陸し、今や、威武堂々と軍旗を翻さむ所存の由。さてこゝに御
願ひ申したき一事と申すは、此僕の詞を御用ひあつて、急ぎドーバー
の港へ御下向下さりませい。然らば必定、其處にてさる御方に、御遊遊
なされませう。さて其御方に、國王殿下が遣ましき御有樣の、因由因緣
を聞え上げうならば、吃度御喜びなさるてムりませう。かく申す某は

決して怪しき者ならず、山緒正しき身分の者。さる方より確かな報道
を受けたる上、かやうな御依頼、も致しまする。

紳　もう少々精しい話が承りたい。

ケン　いやそれは御無用。此某は、見懸よりは少々高い身分の者、疑はしく
思召さば、此なる紙入を御開けなされ、中なる品物（即ち指環）を御持參あれ。
さて彼處にて、コルデリア姫に御逢ひなさらば——吃度御逢ひなさ
れまする——此指環を御覽に入れられませ。然らば此某が、何人と申
す事は、姫より御說明あるてムりませう。おゝ生憎の此暴風雨、某はこ
れより、國王殿下を御尋ね申しまする。

紳　然らば御手を、（と握手しながら）して最早何も言はるゝ事は。

ケン　たつた一言。但し何よりも大切な、と申すは外でもない、某は此方の

道を參りまする、御貴殿は、其方の道を御出なされ。さて眞先に殿下の御姿を認めた者が、聲を懸けて、知らせる事に致さうてはムりませぬか。

と兩人別々に退場

第二場　荒野の別方面

暴風雨未だ止まざる間、リア及道化登場

リア　吹け〳〵風、風袋も裂けるまで、降れ〳〵雨、瀧か川てもぶち撒ける様な大水に、屋棟の塔も、塔の風信子も潰るまで、嚴つん裂く霹靂の前驅と、迅速き電の火も落ちかゝり、此白髮首を焼き焦せ。天地を震ふ鳴る神は、此大地を打ちみしやぎ、萬物を造り成す、造化の鎔型を打碎き、

取分け恩義を知らぬ惡人の、あらゆる種子を絶滅して了へ。

道　おゝ頼む御方。野中の雨に濕れるよりも、家の中て涙の雨に濕れるが優てムりませう。申し我君、御還りなされて、姫君達の御世話を御受けなされませ。此眞暗闇は誰彼の差別もなく、遠慮容赦のない因業者てムりまする。

リア　堪能する程嘲れ雷霆、閃け電光、注げ雨。風雨雷電は我女てはない。汝等に國を與へた覺えはない、我子と呼んだ事もない、何一つ恩を被せた例もなければ如何程此身を苦めうと、不孝者恩知らずと責めは致さぬ。此哀れな、か弱い、ばかな、棄てられた老骨を、此處に曝け出して、汝等の弄ぶがまゝに、任せるぞよ。乍去汝等も彼の淺ましい二人の女に力を合せて、其恐ろしい責道具を、此白髮頭に差向くるとは、さて

さて淺はかな事ぢや、卑怯千萬。

道　イヤ、頭を入れる家のある者は、善い兜を有つと申すもの故、如何なる貴道具も怖くはない。

胸と踵を穿き遖ひ、
胸をか弱く踵を硬く
持てば陷み出す底まめに
寢られぬ夜半もあると聞く
イヤ女と申すは如何な美女でも、鏡臺の前て澁面苦面、顏付の稽固を
せぬ者はムりませぬ

リア　いや予は何事も勘忍する勘忍の模範となつて、何も云はぬ。

ケント登場

ケン　何誰ぢや。

道　主從二人、賢愚兩人。

ケン　さて〳〵此處に御在なされましたか。閨を愛する獸類なりとも、此様な夜は愛しませぬ。夜出て歩く怪物も、此暴風雨に恐れをなし、洞穴深く潛みまする。某も物心附いて以來、此様な電光、雷霆、此様な雨風の凄まじい響を、聞いた覺えはムりませぬ。いや人間力には堪へ切れぬ恐ろしさ、物凄さてムりまする。

リア　ええ、彼の天上に、雷霆を轟かす諸〻の神達も、今こそ諸の罪人を懲らしめ給へ。胸に罪業を蟲んで、正義の撻を逃るゝ罪は震ひおのゝけ。血に汚れ、神を欺き、惡を善に佯る族は潛み隱れよ。巧みに表面を粧うて、何喰はぬ氣の顏をしながら、人の命を狙ふ奴輩は、戰ひ戰うて戰ひ崩

れよ。其外あらゆる隠れ潜める罪人原、汝が胸の秘密を擲げ出して、風雨霆の牛頭馬頭が哀れを乞へ。それにつけても此身には、犯しゝ罪業はあらねども、受けたる罪業は數知れず。

ケン　おゝ御冠物も召させられず。殿下、此近處に一軒の賤が屋がムりまする。此雨風を御凌ぎある爲め、一夜の宿を御借りなされては如何でムります。――暫く此處に御待ちなされませ。僕は其情知らずの家主奴を説伏せて、御宿を承知致させて參りまする。今も今とて御行衛を尋ねながら、立寄りましたに、げんもほろゝの挨拶を致しました實に其小舍の礎の石よりも冷やかな人心。

リア　どうやら心がぐらつき出した。コレ坊主、其方は如何致した。寒いか予も寒いぞ。して其草の舍は何處ぢや。時と場合は不思議なもの、日來

は用もない物が至て貴くなるものぢや。いざ其賤が屋へ案内致せ。

道　ゝ其方達に對しては、まだ心苦しう覺ゆる心があるぞよ。

唄「心だにあらば雨降れ風も吹け、
　身に合せてぞ諦らむる、
　濡れる日もなく降るとても。

リア　實にさうぢや、さらばいざ其賤が屋へ案内致せ。

とリア、ケン退場

道　イヤ、いたづら者を懲らしめるには、此樣な善い晩はないどりや參る前に、一つ愚拙が此國の末來記といふものを誦んで置かう。

僧侶說教實の無い事を喋べる時、酒屋酵母へ水を差す時、仕立屋大名を師匠に取る時、邪宗門炮烙に遇はず、好色の徒身を焦す時、訴訟

事何方も正しい時武士借金を返し、公卿貧乏を逃れる時誹謗舌端に上らぬ時、掏児人込へ這入らぬ時、客嗇者野天で金を數へる時、娼妓女街と寺院建立の時爾時英吉利の國家大に亂れて混沌とならむ。爾時生れ合せた人は、行くに脚を以てするの時世とならむ。あなかしこ。

いや此未來記は後世マーリン（リアの時代以後アーサー王物語時代の豫言者）の口から云はせやう。かく申す愚拙は、マーリンよりも古いぞ〳〵。

と道退場

第三場　グロスター居城内の一室

グロスター、エドマンド登場

グロ　ヤレ〳〵エドマンド、拙者は此樣な不義不孝が大嫌ぢや。國王殿下の御取持は拙者に御任せ下されと申した時、方々には（公爵夫）此館を拙者の手から取上げて置いて、最早殿下の御噂もするな、御取なしも致すな、又は何なりと殿下の御爲めを圖るなとの命令、若し背いたら、一生御機嫌を損ねさうな御口うら。

エド　實に不義不孝の御ン裏動。

グロ　コレサ、何にも云ふな。兩公爵は御仲違ひ。それさへあるに、一大事が出來致した。と申すは今夜さる方より密書到來、其趣は口に出すも危嶮故、ちやんと戸棚へ閉め込んだが、殿下御虐待の報は覿面、今の間にうんと醫を取られうぞ。コレ外の軍勢が既に此地へ乘込んだぞよ。此上は殿下の御味方を致さねばならぬ。拙者はこれから殿下の御行衛

を尋ねて、密かに御介抱を致す故、汝は公爵の御前へ出て、御相手を致し、拙者の此所業を悟られぬやうに致して呉りやれ。若し拙者は如何致したと御尋ねなされたなら、加減が悪うて臥つたと御答へしや。若し露はれたら殺されうも知れぬけれど、故の主君の殿下をば、御助け申さにやおかれぬわ。コリヤひよんな事が持上がらうぞ、エドマンド、何卒氣をつけて呉りやれ。

エドグロ退場

エド　いや其殿下への忠義立、これから早速公爵へ知らせて來る。其密書とやらも打明ける。これは善い御奉公。その報酬には此拙者が、老父を逐出して其後式を引受ける上、何ぞ其上に褒美があらう。年寄が引込めば若い者が世に出るわさ。

エドグロ退場

第四場　荒野　賤が屋の前

リア、ケント及び道化登場

ケン　殿下、此家でムります。いざ御入りなされませ、野天の夜嵐の酷たらしさ。人間の身に堪へ切れるものではムりませぬ。

暴風雨来だ止まざる体

リア　構はずに措いて呉りやれ。

ケン　殿下何卒御入りなされ。

リア　此胸が張り裂けさうぢや。

ケン　いや寧そ某の胸て御身代りを致したうムります。いざ御入りなさ

れませ。

リア　其方は此暴風雨が、皮膚の中まで沁みると思ふか。其方の身にはさうもあらう。乍去大きい悲みのある所には、小さい悲みは入らぬものぢや。熊に遇ふたら逃げもせう、行手を大海に塞がれたら、熊の口へ飛付かう。身躰を厭ふは胸に屈托のない時、我が心中の暴風雨に、打つは動悸の波ばかり、其外には何事も感ぜぬ此身ぢや。ええ、不孝者、食物を運ぶ此手を、此口で噛むやうな恩知らず奴。乍去最早泣かぬ。思入復讐を致して遣らす。でも此様な夜に父を閉出すとは。降れ〳〵いくらでも、予は辛抱致す。ええ、さても此様な夜に。おゝレガン、ゴネリル、領國を挙げて譲りたる、大恩の老親は——おゝそれを思へば、心も物狂ほしくなつて参る。ええ、思ふまい〳〵、最早思ふ事ではない。

ケン　殿下、何卒御入りなされませ。

リア　其方こそ勝手に入るがよい。そして安楽に過すがよい。此暴風雨を薬ていおいて、もつと激しい胸の嵐に、此身をさらしたうも思はぬ。とは申せ這入つて見やう。（と道化に向ひ）汝も這入れ。先づ参れ。おゝ入るに家なき赤貧の徒——いや這入れと申すに。予は先づ祈禱を致して、それから寝むと致さう。

と道化這入る

纏ふに衣なき不幸の輩、何處の浦里にて、此の情無き夜嵐に曝されて、素頭に飢ゑたる腹荒布の如き襤褸衣服、それで此雨風を、どう過ごし居る事ぞ。おゝ此身世に在る時、彼等を等閑に致したが今更殘念。驕れる者よ、身の薬と観念して、此雨風に打たれ曝され、貧者の苦艱を嘗め